

瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財調査概報(VI)

初 田 遺 跡
ヤ ケ ヤ マ 遺 跡
大 浦 浜 遺 跡
長 崎 通 り 遺 跡
長 崎 古 墳

1983・3

本州四国連絡橋公団
香川県教育委員会

瀬戸大橋建設に伴う 埋蔵文化財調査概報(VI)

初田遺跡
ヤケヤマ遺跡
大浦浜遺跡
長崎通り遺跡
長崎古墳

1983・3

本州四国連絡橋公団
香川県教育委員会

例　　言

1 本書は、昭和57年度に瀬戸大橋建設に伴って実施した、坂出市岩黒島初田遺跡・櫃石島大浦浜遺跡・ヤケヤマ遺跡・長崎通り遺跡・長崎古墳の発掘調査概報集である。

なお、昭和55・56年度に実施した、櫃石島大浦浜遺跡の遺物整理結果の一部を併せて収録した。

2 発掘調査は、本四公団より委託をうけ、香川県教育委員会文化行政課が実施した。

調査組織は次のとおりである。

総括課長	笹川高美	調査総括所長	増田正伯
課長補佐	林茂	係長	秋山忠
副主幹	松本豊胤	調査担当	
庶務係長	下河芳樹	(岩黒島) 技師	藤好史郎
主任主事	小国史郎	嘴託	玉城一枝
主事	建畠一子		中本雅之
		(櫃石島) 主任技師	廣瀬常雄
		技師	林正弘
		ノ	安田和文
		ノ	野中寛文
		嘴託	田村雅彦
		ノ	坂口淳子
		整理担当	真鍋昌宏

3 調査後の整理・報告は、調査担当者がそれぞれ分担して行った。執筆分担は文末に明記した。編集は各遺跡ごとに行った後、全体編集を林・藤好が行った。

4 調査の実施に際し、岩黒島自治会、櫃石島瀬戸大橋対策協議会・同自治会から多大なご協力を受けた。記して謝意を表したい。

総 目 次

I 海峽部埋蔵文化財発掘調査の経過

II 岩黒島初田遺跡の調査

第1章	はじめに.....	7
第2章	位置と環境.....	8
第3章	調査の経過.....	11
第4章	調査区および土層序.....	12
第5章	出土遺物.....	18
第6章	おわりに.....	31

III 檜石島の調査

第1章	はじめに.....	43
第2章	ヤケヤマ遺跡.....	49
第3章	大浦浜南端調査区遺跡.....	74
第4章	長崎通り遺跡.....	86
第5章	長崎古墳	137

IV 檜石島大浦浜遺跡の遺物整理167

付 載 檜石島より出土した貝類の考察171

四 版 目 次

- | | |
|-----------------------------|-------------------------------|
| (岩黒島初田遺跡の調査) | 8202・8203(東より) |
| 図版第1 (1) A地区遠景(北から) | (3) 大浦浜遺跡南端調査区 S Z8201・ |
| (2) A地区 h・i列(東から) | 8202・8203(北より) |
| (3) A地区12列 g・h・i(北東から) | (4) 大浦浜遺跡南端調査区 S Z8201(東より) |
| 図版第2 (1) A地区から12列 a～f(北東から) | (5) 大浦浜遺跡南端調査区 S Z8201(南よ |
| (2) A地区12列 j～m(南東から) | り) |
| (3) B地区遠景(北から) | 図版第4 (1) 大浦浜遺跡南端調査区 S Z8201(南 |
| 図版第3 (1) B地区完掘状況(北から) | より) |
| (2) B地区 i列(北西から) | (2) 大浦浜遺跡南端調査区 S Z8201(南よ |
| (3) B地区 g～i列3・4(北から) | り) |
| 図版第4 (1) B地区 i列3・4土層(東から) | (3) 大浦浜遺跡南端調査区 |
| (2) B地区 i列(南東から) | 図版第5 (1) 長崎通り遺跡全景・調査前(北より) |
| (3) B地区 i列(南から) | (2) 長崎通り遺跡全景・調査後(北より) |
| 図版第5 (1) C地区遠景(北西から) | 図版第6 (1) 長崎通り遺跡O-47～O-50(南より) |
| (2) C地区第1トレンチ(西から) | (2) 長崎通り遺跡N～P-39～46(北より) |
| (3) C地区第2トレンチ(北東から) | (3) 長崎通り遺跡K～O-31(西より) |
| 図版第6 (1) C地区第3トレンチ(北から) | 図版第7 (1) 長崎古墳全景(南より) |
| (2) C地区第3トレンチ(北東から) | (2) 長崎古墳全景(北より) |
| (3) C地区第4トレンチ(西から) | 図版第8 (1) 長崎古墳横穴式石室(東より) |
| 図版第7 ナイフ形石器 | (2) 長崎古墳横穴式石室(西より) |
| 図版第8 窓状剥片・同石核・横長剥片・同石核・舟 | (3) 長崎古墳横穴式石室(南より) |
| 底形石器他 | 図版第9 (1) 長崎古墳横穴式石室(東より) |
| 図版第9 縦長剥片他 | (2) 長崎古墳横穴式石室(西より) |
| 図版等10 細石刃核・細石刃・ハリ貫安山岩原石他 | (3) 長崎古墳横穴式石室(南より) |
| 図版第11 チャート | 図版第10 (1) 長崎古墳横穴式石室(北より) |
| 図版第12 海岸部採集石器 | (2) 長崎古墳横穴式石室(西より) |
| 図版第13 リ 石器・土器 | (3) 長崎古墳横穴式石室(南より) |
| 図版第14 リ 土器・土製器 | 図版第11 (1) 長崎古墳横穴式石室基底石(南より) |
| (櫛石島の調査) | (2) 長崎古墳横穴式石室掘り方(南より) |
| 図版第1 (1) ヤケヤマ遺跡a～N～5全景(西 | 図版第12 (1) 長崎古墳土層(南より) |
| より) | (2) 長崎古墳土層(南より) |
| (2) ヤケヤマ遺跡R-56～R-69全景(南 | (3) 長崎古墳玄門部(南より) |
| より) | 図版第13 (1) 長崎古墳周溝内土器出土状態(西より) |
| (3) ヤケヤマ遺跡N-56ピット(南より) | (2) 長崎古墳周溝内土器出土状態(西より) |
| 図版第2 (1) ヤケヤマ遺跡a～E東壁(西より) | (3) 長崎古墳周溝内土器出土状態(北より) |
| (2) ヤケヤマ遺跡R-61東壁(西より) | 図版第14 (1) ヤケヤマ遺跡出土ナナイフ形石器(背面) |
| (3) ヤケヤマ遺跡M-56東壁(西より) | (2) ヤケヤマ遺跡出土ナナイフ形石器(腹面) |
| 図版第3 (1) 大浦浜遺跡南端調査区全景(東より) | 図版第15 (1) ヤケヤマ遺跡出土ナナイフ形石器(背面) |
| (2) 大浦浜遺跡南端調査区 S Z8201・ | (2) ヤケヤマ遺跡出土ナナイフ形石器(腹面) |

- 図版第16 (1) ヤケヤマ遺跡出土横長剝片(背面)
(2) ヤケヤマ遺跡出土横長剝片(腹面)
- 図版第17 (1) ヤケヤマ遺跡出土縦長剝片(背面)
(2) ヤケヤマ遺跡出土縦長剝片(腹面)
- 図版第18 (1) ヤケヤマ遺跡出土横長・縦長剝片石核
(2) ヤケヤマ遺跡出土横長・縦長剝片石核
(裏面)
- 図版第19 (1) ヤケヤマ遺跡出土細石刃(背面)
(2) ヤケヤマ遺跡出土細石刃(腹面)
(3) ヤケヤマ遺跡出土尖頭器
(4) ヤケヤマ遺跡出土尖頭器(裏面)
(5) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剝片
(背面)
(6) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剝片
(腹面)
- 図版第20 (1) ヤケヤマ遺跡出土チョッピング・ツール, スクレイパー(背面)
(2) ヤケヤマ遺跡出土チョッピング・ツール, スクレイパー(腹面)
- 図版第21 (1) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剝片
(背面)
(2) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剝片
(腹面)
(3) ヤケヤマ遺跡出土石鏃
- 図版第22 (1) 南端調査区出土土師器椀
(2) 南端調査区出土土師器椀
(3) 南端調査区出土土鐘
(4) 南端調査区出土輸入磁器
- 図版第23 (1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器①類
(背面)
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器①類
(腹面)
- 図版第24 (1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器②・③類(背面)
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器②・③類(腹面)
- 図版第25 (1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器④類
(背面)
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器④類
(腹面)
- 図版第26 (1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑤類
(背面)
- (2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑤類
(腹面)
- 図版第27 (1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑥類
(背面)・舟底形石器
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑥類
(腹面)・舟底形石器
- 図版第28 (1) 長崎通り遺跡出土横長剝片石核
(2) 長崎通り遺跡出土横長剝片石核(裏面)
- 図版第29 (1) 長崎通り遺跡出土横長剝片(背面)
(2) 長崎通り遺跡出土横長剝片(腹面)
- 図版第30 (1) 長崎通り遺跡出土縦長剝片石核・縦長剝片
(2) 長崎通り遺跡出土縦長剝片石核・縦長剝片(裏面)
- 図版第31 (1) 長崎通り遺跡出土細石刃核
(2) 長崎通り遺跡出土細石刃核(裏面)
- 図版第32 (1) 長崎通り遺跡出土細石刃
(2) 長崎通り遺跡出土細石刃
(3) 長崎通り遺跡出土二次調整ある剝片
(背面)
(4) 長崎通り遺跡出土二次調整ある剝片
(腹面)
- 図版第33 (1) 長崎通り遺跡出土細石刃核末製品
(2) 長崎通り遺跡出土黒曜石剝片
- 図版第34 (1) 長崎通り遺跡出土ハリ賀安山岩剝片
(2) 長崎通り遺跡出土ハリ賀安山岩剝片
(裏面)
- 図版第35 (1) 長崎通り遺跡出土尖頭器
(2) 長崎通り遺跡出土尖頭器(裏面)
- 図版第36 (1) 長崎通り遺跡出土スクレイパー
(2) 長崎通り遺跡出土スクレイパー(裏面)
- 図版第37 (1) 長崎通り遺跡出土石鏃・ドリル
(2) 長崎通り遺跡出土土叩き石
- 図版第38 長崎古墳出土須恵器杯蓋・杯身
- 図版第39 長崎古墳出土須恵器杯身・提瓶・匙
- 図版第40 長崎古墳出土須恵器横瓶・壺、土師器杯・壺、土製品、歩渡島1号棺出土鉄器、鏡
- 図版第41 長崎古墳出土装身具
(櫛石島大浦浜遺跡の遺物整理)
- 図版第1 織文土器(前期末・中期後半)
- 図版第2 織文土器(後期初)

挿 図 目 次

(海峽部埋蔵文化財発掘調査の経過)

第1図 備讃瀬戸の島々	1	第15図 横長・縦長剣片石核実測図	67
第2図 横石島ヤケヤマ遺跡発掘調査風景	2	第16図 尖頭器・二次調整ある剣片実測図	68
第3図 横石島長崎古墳発掘調査風景	3	第17図 チョッピングトゥール・スクレイパー・二 次調整ある剣片実測図	69
第4図 遍びこまれた遺物の山	4	第18図 石鏃実測図	70
(岩黒島初田遺跡の調査)		第19図 土器・土製品実測図	71
第1図 岩黒島初田遺跡周辺地形図	10	第20図 M-55区出土瓦質土器実測図	71
第2図 発掘区位置図	13	第21図 銭貨拓影	72
第3図 グリッド及び石材別分布図(i)	14	第22図 大浦浜遺跡南端調査区地形図及び発掘区位 置図	75
第4図 グリッド及び石材別出土分布図(ii)	15	第23図 大浦浜遺跡南端調査区グリッド設定図	76
第5図 A・B地区土層図	16	第24図 C-1~3区南壁土層図	77
第6図 B・C地区土層図	17	第25図 南端調査区遺構配置図	78
第7図 初田遺跡出土石器実測図(i)	19	第26図 南端調査区石組み遺構S Z8201実測図	79
第8図 初田遺跡出土石器実測図(ii)	21	第27図 南端調査区石組み遺構S Z8201断面実測図	79
第9図 初田遺跡出土石器実測図(iii)	25	第28図 南端調査区石組み遺構S Z8202実測図	80
第10図 初田遺跡出土石器実測図(iv)	26	第29図 南端調査区石組み遺構S Z8203実測図	80
第11図 横石島花見山遺跡出土石器	29	第30図 南端調査区出土須恵器実測図	81
第12図 初田遺跡出土遺物実測図	29	第31図 南端調査区出土土師器・黑色土器・瓦質土 器実測図	82
第13図 出土古鉄拓影	30	第32図 南端調査区出土製塙土器実測図	84
第14図 海岸部探集遺物実測図(i)	35	第33図 南端調査区出土輸入磁器実測図	84
第15図 海岸部探集遺物実測図(ii)	36	第34図 南端調査区出土漁具実測図	85
第16図 海岸部探集遺物実測図(iii)	37	第35図 長崎通り遺跡地形図及び発掘区位置図	87
第17図 各種石器計測部位一覧	39	第36図 主軸線設定図	88
(横石島の調査)		第37図 土層模式図	89
第1図 横石島全体図	44	第38図 長崎通り遺跡土層図(1)	91
第2図 横石島の遺跡	46	第39図 長崎通り遺跡土層図(2)	92
第3図 ヤケヤマ遺跡地形図及び発掘区位置図	50	第40図 長崎通り遺跡土層図(3)	93
第4図 N-E-5区南壁土層図	53	第41図 長崎通り遺跡土層図(4)	94
第5図 a-D-5区南壁土層図	54	第42図 長崎通り遺跡土層図(5)	95
第6図 R-69~62区東壁土層図	55	第43図 長崎通り遺跡土層図(6)	96
第7図 R-61~56区東壁土層図	56	第44図 長崎通り遺跡土層図(7)	97
第8図 M-57~55区東壁土層図	57	第45図 長崎通り遺跡土層図(8)	98
第9図 M-N-56区遺構配置図	59	第46図 細出土石器分布図	103
第10図 平面出土分布図	61	第47図 ナイフ形石器出土分布図	103
第11図 ナイフ形石器実測図	63	第48図 横長剣片・同石核分布図	104
第12図 横長剣片実測図	64	第49図 縦長剣片・同石核分布図	104
第13図 縦長剣片実測図	65		
第14図 細石刃実測図	66		

第50図	細石刃核・細石刃・細石刃核末製品分布図	105	第88図	装身具類実測図	148
第51図	ハリ賀安山岩剝片分布図	105	第89図	歩渡島古墳群の埋葬施設と遺物	151
第52図	ナイフ形石器①類実測図	107	(櫻石島大浦浜遺跡の遺物整理)		
第53図	ナイフ形石器②③類実測図	109	第1図	縄文土器の分類グラフ	167
第54図	ナイフ形石器④類実測図	110	第2図	縄文土器の分類グラフ	167
第55図	ナイフ形石器⑤類実測図	111	第3図	縄文土器拓影(1)	168
第56図	ナイフ形石器⑥類実測図	112	第4図	縄文土器拓影(2)	169
第57図	舟底形石器実測図	112	第5図	縄文土器拓影(3)	170
第58図	横長剝片石核実測図(1)	114			
第59図	横長剝片石核実測図(2)	115			
第60図	横長剝片実測図(1)	116			
第61図	横長剝片実測図(2)	117			
第62図	縱長剝片石核実測図	118			
第63図	縱長剝片実測図	120			
第64図	二次調整ある剝片実測図	122			
第65図	細石刃核実測図(1)	123			
第66図	細石刃核実測図(2)	124			
第67図	細石刃実測図	125			
第68図	細石刃核末製品実測図	127			
第69図	ハリ賀安山岩剝片実測図	128			
第70図	黒曜石剝片実測図	129			
第71図	尖頭器実測図(1)	130			
第72図	尖頭器実測図(2)	131			
第73図	スクレイバー実測図	133			
第74図	石鏃・ドリル・叩石実測図	134			
第75図	長崎古墳東西土層図	137			
第76図	長崎古墳平面実測図	138			
第77図	横穴石室実測図	139			
第78図	横穴式石室実測図	140			
第79図	横穴式石室掘り方実測図	141			
第80図	横穴式石室閉塞石実測図	142			
第81図	石棺実測図	142			
第82図	横穴式石室遺物出土状況	143			
第83図	周溝内土器溜り1実測図	144			
第84図	周溝内土器溜り2実測図	144			
第85図	土器実測図(1)	145			
第86図	土器実測図(2)	146			
第87図	鉄器実測図	147			

表 目 次

挿 入 写 真

(海峡部埋蔵文化財発掘調査の経過)

第1表 海峡部埋蔵文化財発掘調査の経過	5	(岩黒島初田遺跡の調査)
第2表 発掘調査面積	5	写真1 調査区より与島・羽佐島をのぞむ
(岩黒島初田遺跡の調査)		写真2 伐開風景
第1表 島嶼部出土チャート関係「石器」一覧表	28	写真3 作業風景
第2表 出土古鏡一覧表	30	写真4 作業風景
第3表 初田遺跡出土石器観察表	39~40	写真5 調査区より横石島をのぞむ

第4表 初田遺跡出土土器・土製品観察表	41
第5表 海岸部採集石器観察表	41
第6表 海岸部採集土器・土製品観察表	42

(横石島の調査)

第1表 グリッド別石器出土表	60
第2表 土層別横長剝片出土数	90
第3表 グリッド別右器出土表	101~102
第4表 縦長剝片計測表	121
第5表 石器計測表	153~160
第6表 大浦浜遺跡南端調査区出土土器観察表	161
第7表 大浦浜遺跡南端調査区出土製塩土器 観察表	162
第8表 長崎古墳出土土器観察表	163
第9表 長崎古墳出土土玉計測表	165

(横石島大浦浜遺跡の遺物整理)

第1表 大浦浜遺跡ヤケヤマ東麓地区縄文石器一覧 表	168
------------------------------	-----

I 海峡部埋蔵文化財発掘調査の経過

I 海峡部埋蔵文化財発掘調査の経過

——昭和57年度調査を中心にして——

瀬戸大橋建設に伴う海峡部埋蔵文化財発掘調査も予備調査以来7年目、いよいよ終盤を迎えた。

架橋地点となる櫃石島・岩黒島・羽佐島・与島の四島合わせて約9万m²におよぶ発掘調査の経過には、いろいろな曲折があった。なにしろ島嶼部における大規模調査であり、調査員の通勤や発掘作業員の確保も容易ではなく、調査対象地区的用地買収状況・架橋工事の工程変更等によっても調査計画を変更しなければならないことが何度かあった。それでも、昭和55年度調査の24,583m²をピークとして、羽佐島・与島の現場調査が終了し、なんとか当初予定通りの進行をみてきた。この間、島々の遺跡群は旧石器時代から古代・中世に至る多様な内容を示し、膨大な量の出土遺物をもたらしている。

櫃石島花見山遺跡・羽佐島遺跡・与島西方遺跡などから出土した旧石器及び剝片類は、なんと60万点を数える。その、ナイフ形石器の時代から旧石器時代最終末の細石器文化期に至るまでの各種・多量な遺物は、この地域がサヌカイトの原産地（坂出市金山・城山、綾歌郡国分寺町国分台一帯）を背後に控えた日本有数の旧石器遺跡密集地域であることを端的に物語っている。



第1図 備讃瀬戸の島々

る。また、櫃石島大浦浜遺跡は、これまでの調査で縄文時代から中世にかけての長期間にわたる複合遺跡であることが明らかになった。そこでは、古代製塩の動きをさまざまと伝える厚い製塩土器包含層の広がりが確認され、砂浜上で催されたであろう古代祭祀の遺物も数多く出土した。祭祀に関しては、古墳時代にさかのぼる船形土製品・ミニチュア土器のほか、奈良時代以降の奈良三彩小壺・朝十二錢・帶金具・小鈴などの国家的行事を示す貴重な遺物を得ている。与島塩浜遺跡では、中世の漁業集落を想わせる柱穴群が検出された。いずれをとっても、備讃瀬戸の3万年にわたる歴史を解き明かしていくうえで重要な手がかりとなるものばかりである。

さて、今年度は現場調査の最終年度にある。例年どおり昭和57年4月1日付けて本州四国連絡橋公團（以下、本四公團という）との間で締結した「海峡部埋蔵文化財発掘調査委託契約（その6）」によって調査に着手した。調査対象地区は、櫃石島の大浦浜遺跡2,800m²・ヤケヤマ遺跡4,700m²・長崎通り遺跡5,800m²と岩黒島初田遺跡5,036m²の都合18,336m²である。大浦浜遺跡は昭和55年度からの継続調査で、遺跡の主要部はすでに調査が済み、今年度はその外縁部にあたる浜の北西（2,400m²）及び南端地区（400m²）が対象。ヤケヤマ遺跡は大浦浜の北部を限る尾根丘陵にあたり、旧石器の散布地。長崎通り遺跡は島の南端部を形造る細長い尾根丘陵で、やはり旧石器の散布地。初田遺跡は、岩黒島南西部の丘陵地に所在する初田神社周辺の旧石器散布地である。ここは、昨年度1,000m²を対象に調査を行う予定であったが、年内に用地買収が整わず今年度調査となった。しかも、新たに大橋連接の昇降道建設に伴う3,000m²と、初田神社の移転地及び参道部分の1,036m²が調査対象地に加わった。

ヤケヤマ遺跡は、かっての予備調査対象地区からはずれていたが、事前の踏査や足下に大浦浜一帯を望む地形環境からみて、遺跡の内容にある程度の期待がもたられた。そのため、約4ヶ月間の調査を予定した。なるほど東に緩く下る尾根筋を中心に約1,100点の旧石器及び剝片類が出土したが、南斜面ではほんのわずか、全体的に予想を下回る遺物量であった。おのづと調査期間は短縮され、4月下旬から5月末までをもって終了した。

大浦浜遺跡の北西地区は、浜の東縁に形成された浜堤部の後背湿地にあたり、ほとんど遺構や遺物の出土がなく、4月下旬には調査を終了した。しかし、この地区を含めて、大浦浜の形成過程に関する資料が得られたわけで、遺跡の示す各時代の地形復原を試みることも可能であろう。これに対し、海岸線が真近に迫る南端地区では、昨年度の調査地区北寄りで中世初頭の湧水溜遺構や土鍤、ふいご口、円板状土製品・同石製品等が出土しているため、さらに南部への遺跡の広がりがあるかどうかを確認する調査を行った。わずかの平坦面に限られる調査地点では遺構の存在を予測することができなかったが、厚い堆積土の下部より中世前半頃の方形石組み遺構3基が現われ、最終的には全面的な発掘調査となった。従って、調査は5月末終了予定を大幅に越えて8月末までを要した。

長崎通り遺跡の調査区は、北のやや高まる丘陵部から南の櫃岩（巨岩が露頭、櫃岩大明神の



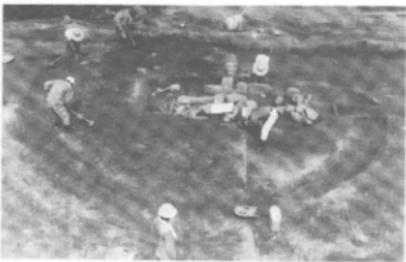
第2図 櫃石島ヤケヤマ遺跡発掘調査風景

小祠祭祀)までの平坦にちかい尾根筋である。これに加えて、時代をさかのぼった祭祀遺跡ではないかと考えられた樅岩の周辺部で約60m²、また調査区南部に接する東斜面の石組み状残石が、破壊された古墳の残骸とも見受けられ、それを含めた周辺部約130m²についても、工事区域隣接地であり、幸い地権者のご理解が得られたので今回の調査対象地とした。しかし、樅岩周辺部では祭祀に係る遺構・遺物が検出できず、東斜面の残石も、上方に所在した古墳の破壊に伴い、移し集められたものであることが分った。その調査区南部で検出した周溝を巡らす円墳(長崎古墳)の横穴式石室については、全く予想外であった。しかも、古墳の基底部しか残存していない状況であったが、石室内部に板石を立てた組合せ箱式石棺を有するという特殊な構造が認められた。この地区的旧石器の散布は、予想通り北の丘陵部で多く、尾根筋では減少しており、約2,200点の出土である。6月にとりかかった調査は、思いがけない古墳調査に少々の手間取りがあったものの、9月下旬に終了した。当初、9月中旬から12月末までの調査予定であったことを思えば、意外な展開をみたことになる。

初田遺跡の主要部をなす神社周辺の4,000m²については、用地買収の完了を待って5月上旬より調査を始めた。ほぼ予備調査の所見通りで遺物量も少なく、7月下旬には対象区の調査を終了した。引き続いて神社移転地及び参道部分の調査を予定したが、用地買収が整わず、一旦調査を打ち切らざるをえなかった。その後、用地買収が成立した8月中旬に第二次調査を実施し、発掘区の埋め戻しや用具の撤収等もあわせ行った。

以上のように、今年度の現場調査は4月以来順調に進行し、予定の対象地区18,336m²を9月下旬までに終えることができた。当初の全体計画からみれば、3ヶ月間の短縮である。これは、対象遺跡の大半が旧石器の散布地であること、そのうえ出土遺物が他の旧石器遺跡に比べ少量であったこと、発掘作業を効率的に進めえたことなどの状況によるものであろう。このため、現在、本四公団との間で現場調査短縮に伴う契約変更(調査経費の減額を内容とする)の手続きをとっている。なお、今回の契約変更には、大浦浜遺跡における本四公団借地区域(昨年度調査区の東側に隣接、工事作業ヤードの造成地)約2,000m²の調査予定(昭和58年1月~2月)を含めるものとした。当該区域には、浜の南から砂嘴状に延びた2m等高線がかかり、地表下60cm前後で古墳時代後期の製塙土器包含層が広がり、その下部及び周辺部の下層に縄文土器包含層の存在が予測される。

今年度内に、大浦浜遺跡における本四公団借地区域の調査を残しているものの、一応9月末現在で契約上のすべての現場調査を終了したことになる。どうやら、海峡部埋蔵文化財発掘調査事業の、昭和57年度を現場調査の最終年度とする所期の目標が達成できたわけである。しかし、調査予定の借地区域がそうであるように、今後も島嶼部の架橋関連工事に伴う調査に迫られることがあるだろう。四島のどの遺跡も既調査区(架橋工事区)の周辺部にかなり広がりをもつことが分っている。これまでの遺跡調査が、ほとんど記録保存の段階にとどまっているだけに、これ以上の調査は避けたいものである。



第3図 樅石島長崎古墳発掘調査風景

ところで、海峡部埋蔵文化財発掘調査担当職員は、昨年同様に香川県教育委員会文化行政課坂出連絡事務所付けの文化財調査2係として現場調査と資料整理に従事した。現場調査は櫃石島及び岩黒島の各現場調査主任のもとに二班の職員編成で行い、事務所における資料整理には整理主任の指導によって常時15~16名の整理作業員があたった。資料整理についていえば、事務所に運び込まれたきわめて多量な遺物・図面等をいかに能率的、系統的に整理していくかで苦慮してきたが、漸く今年度は遺物の復原や実測、図面のトレース等の作業工程におけるシステム化（工程別の班編成作業）に相当な成果をあげることができた。もちろん、そこではシステム化に相応した技量を保有し、一定の作業量を消化し得る整理作業員の確保が先決の課題であり、その点について今後とも十分な配慮が必要である。

なお、今年度の資料整理では本調査概報の作成に関わることのほか、主として羽佐島遺跡出土の旧石器の実測、大浦浜遺跡出土の縄文・弥生土器の復原作業に取り組んでいる。

これまでの海峡部埋蔵文化財発掘調査の概要については『予備調査報告(I)・(II)』に続く『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(I)~(VI)』において公表してきた。さらに、広く一般の方々にも掘り起こした島々の歴史をわかり易く紹介しようと、『語りかける埋蔵文化財・備讃瀬戸の島々(I)~(III)』の小冊子を刊行したり、數回にわたる海峡部埋蔵文化財資料展を開催（今年度は昭和58年2月~3月・高松市白梅会館で予定）している。そして、ここに今年度の『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(VI)』を刊行するはこびとなつたが、やはり調査の概要報告にとどまるものであり、取り上げられなかつた調査資料も多い。

われわれ調査員の目の前には、膨大な調査資料が所狭しと山積みされている。まるで、事務所内は遺物収納のコンテナや棚、図面ケースなどに占領されんばかりである。現場調査に一応の段落がついたといえども、まだまだ調査終了のベルを聞くまでに時間がかかる。これまで以上にじっくりと腰をすえ、一つ一つの資料を十分に見きわめていかなければならない。来年度から昭和60年度にかけて予定されている本格的な整理業務において、どれだけ、消えゆく島々の遺跡が語る歴史を適確に再現していけるか、われわれに課せられた責務はまことに大きい。むしろ、これからが正念場である。

(秋山)



第4図 運びこまれた遺物の山

第1表 海峽部埋蔵文化財発掘調査の経過

島名	遺跡名	概要	調査対象面積	52年度	53年度	54年度	55年度	56年度	57年度
櫛石島	ガシマ	中世寺跡・墓地・五輪塔・藏骨器・日常雜器等出土。	12,700		12,700				
	花見山	旧石器の濃密な包蔵地。細石器の出土点数は西日本有数。	8,956		3,000	5,956			
	大浦	旧石器の散布地。縄文早期の押型文土器出土。	3,280			3,280			
	大浦浜	縄文時代から古代・中世に至る濃密な遺物包蔵地。製塩遺跡・祭祀遺跡の性格をもつ。	19,800				7,000	10,000	2,800
	ヤケヤマ	旧石器の散布地	4,700						4,700
	長崎通り	旧石器の散布地。長崎古墳(周溝を伴う円墳・横穴式石室に箱式石棺)	5,800						5,800
岩黒島		旧石器の散布地	5,036						5,036
羽佐島		旧石器の濃密な包蔵地。約25万点の旧石器及び剝片類出土。	4,254	1,248	3,006				
与島	A	中世の漁業集落跡。日常雜器・漁具・輸入磁器等出土。	5,597			5,597			
	B	旧石器の散布地	1,250			1,250			
	C	縄文遺物包蔵地	3,926		3,926				
	A	旧石器の濃密な包蔵地。弥生中期後半の土器出土。	4,500	3,000	1,500				
	B	旧石器の散布地	1,500		1,500				
	C	旧石器の散布地	7,200				1,500	5,700	
合計			88,499	3,000	4,248	22,632	24,583	15,700	18,336

第2表 昭和57年度発掘調査面積

遺跡名		当初契約	変更契約	調査の概要等
櫛石島	大浦浜	2,800(m ²)	4,800(m ²)	北西地区は昭和56年度調査の継続。南端地区において中世の石組み遺構3基を検出した。昭和58年1月～2月本四公団備地区域(2,000m ²)の発掘調査を予定している。
	ヤケヤマ	4,700	4,700	旧石器の散布地。約1,100点の旧石器及び剝片類が出土。予想を下回る遺存量であったため調査期間が短縮された。
島	長崎通り	5,800	5,800	旧石器の散布地。約2,200点の旧石器及び剝片類が出土。調査区南部で古墳時代後期の周溝を伴う円墳の横穴式石室1基を検出した。
	岩黒島	5,036	5,036	旧石器の散布地。約700点の石器及び剝片類が出土。神社移転地の買取関係で2次にわたる調査を実施。
計		18,336	20,336	

II 岩黒島初田遺跡の調査

第1章 はじめに

岩黒島は坂出沖約10kmに位置し、塩飽諸島に属する。東南部が馬蹄形に開く丘陵とその間の低地からなる。丘陵部は標高29.2mの初田神社を中心として20m前後の尾根が連なっている。昭和52年度に瀬戸大橋建設に伴う予備調査を実施し⁽¹⁾、旧石器時代の遺物の散布地と確認された。予備調査を実施した昭和52年は、瀬戸大橋の本工事対象地域だけが決定されていた段階であり、初田神社の西南部を中心として2×2mのトレンチを10箇所設定し、計40m²の予備調査を行なった。その後、瀬戸大橋に対する進入路である昇降道の建設が決定し、また工事予定地内の初田神社の移転予定地を含めて、今回報告する昭和57年度の本調査を実施することとなつた。そのため当初計画していた1,000m²の調査対象面積が最終的には5,036m²に増加した。

予備調査では旧石器時代の遺物として、サヌカイトを用いたナイフ形石器やフレイク・チップ類が出土しており、島嶼部の他の旧石器時代の遺跡同様石器製作が行なわれたことは事実であろう。

備讃瀬戸の島々に立地する旧石器時代の遺跡は、すでに概要を報告している与島西方遺跡⁽²⁾、羽佐島遺跡⁽³⁾などに代表されるように、膨大な数量の遺物が層位を分かつことなく限定された丘陵の尾根筋を中心として出土する特徴を有する。遺物は量的にも質的にバラエティに富んでおり、時期差を有した遺物が異常に密集した包含層を複数の文化層に分ける上で困難さを伴う。こうした中で岩黒島初田遺跡の周辺部は、近接する羽佐島とほぼ同じ標高を計り、なだらかでかなり広い尾根を有するという地形的類似点を持つ。しかも旧石器時代の遺物がフレイク・チップ類を含んでいることから石器製作が行なわれたことを示し、層位を異にすることなく時期差を有するユニットが重複するほど遺物密度を暗示するデータは予備調査では出ていない。もしユニットと考えられる遺物の集中箇所が検出されれば、単一時期の所産である可能性が比較的高い。調査にあたっては遺物集中箇所の検出に努め、島嶼部の旧石器時代の遺跡立地状況から岩黒島初田遺跡の尾根筋を中心に調査区を設定した。

調査区は尾根筋の方向が対象地内において異なることから三分割した。初田神社の南部をA地区、北部をB地区とし、神社移転予定地をC地区とした。A地区は予備調査で遺物が比較的多く出土したこともあり、尾根筋に8m幅で発掘区を設け、加えて尾根を横断するように南北方向にも発掘区を設定している。実質発掘面積は380m²である。B地区、C地区は予備調査を実施していないところがほとんどであり、まず遺物の有無・土層の確認のための予備調査的にトレンチを設定した。B地区・C地区は調査の結果削平が著しく遺物量も少ないと判明した。実質発掘面積はB地区が184m²、C地区が114m²である。各地区を合計した実質発掘面積は678m²である。

(藤好)

注

- (1) 香川県教育委員会「第4章 岩黒島の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告(II)』 1978年3月
- (2) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告(I) 与島西方遺跡』 1979年3月
- (3) 香川県教育委員会「II 羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(III)』 1980年3月

第2章 位置と環境

岩黒島初田遺跡は坂出市岩黒に所在し、北に櫃石島、南に羽佐島、与島を眺望できる位置にある。本島を中心としたいわゆる塩飽諸島のひとつに数えられる岩黒島は、馬蹄形を呈した面積0.16km²、周囲わずか1.7kmの小島である。漁港を臨む東側の低地に集中した民家をとりまくかたちでC字形に尾根がめぐる。最高所でも海拔わずか29mであり、その高台の一角に初田神社が位置する。社伝によれば、寛政2年8月、岩黒島の開拓に貢献した天満与力、初田助十郎を祀ったことに始まったという。佐柳島乗蓮寺の記録によれば、移住の経緯云々についての異伝もあるが、いずれにしても文献では、それ以前は無人島であったと伝えられており⁽¹⁾現在島に生きる人々の生活の基盤は江戸時代に築かれたものである。

岩黒島は花崗岩から成っている。遺跡の存在の可能性については、サヌカイトのまばらな散布が注意される程度で、あまり顧みられることがなかった。その後、瀬戸大橋架橋によって姿を変えてしまう島々の埋蔵文化財包蔵状況確認のため、昭和52年度に、南西部の尾根筋を中心にして予備調査が実施された⁽²⁾。その結果、土器片などと共に少量ながらナイフ形石器が出土し、同じような状況下で調査の行われた櫃石島・羽佐島・与島と同様に後期旧石器時代の遺物が散布することが確認されるに至った。今回の調査においてはさらに細石器文化期に属する遺物が検出され、この遺跡の時期的な広がりが明らかになってきた。また、浜辺で採集した遺物は旧石器から縄文・弥生・古墳時代さらには中世にいたる各時代のものを含んでいるが、中心となる遺物はやはり旧石器時代のものである。

ナイフ形石器、そしてそれに続く細石刃の発達した時代は後期洪積世・ウルム氷河期から沖積世にかかる時代である。当時の地形は海底のボーリング調査などによって次第に明らかにされてきている。ほぼ南北に直線状にならぶ櫃石島・岩黒島・与島付近の海底地質は、各々の島と同様花崗岩から成っている。島々のすぐ西側には南北方向の不規則な帯状を呈した槌ノ戸瀬戸層が分布し、含まれている化石の分析等によって、この地層が堆積當時、「淡水性の影響の強い湾奥部の泥相堆積環境」⁽³⁾にあったことが明らかにされている。また、櫃石島一岩黒島間、岩黒島一与島間にそれぞれ潮流掘り下げによるものと考えられるすりばち状の海釜が存在するものの、岩黒島をとりまく海域は大部分が水深20mにも満たない平坦な海底面を形成している⁽⁴⁾。当時の氷化現象による海面低下は、約2万年前の一140mを最高とし、-40mまでの間で変動したと考えられている⁽⁵⁾。海釜を除けば、水深60mを越す部分のほとんど浅い瀬戸内海は、出土する石器が使用された時代には陸地化し、現在の島々は小高い丘陵となっていたことであろう。かつて櫃石島・岩黒島・羽佐島・与島は、近接した位置で似たような地形を呈していたと考えられる。

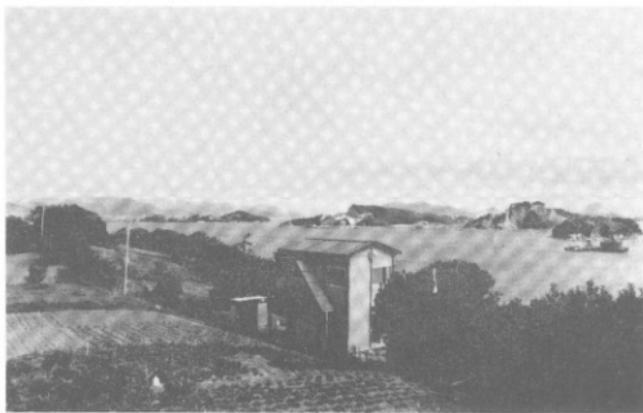
櫃石島・羽佐島・与島の尾根筋を中心とした調査においては、岩黒島とは比較にならない膨大な旧石器時代の遺物を検出している。これらは特に攪乱は受けっていないものの、遺物の流失しやすい状況のなかで、いわゆる「ユニット」としての単一文化面でとらえられる一等資料は得られなかつたが、石核、剥片などを多量に含む遺物の濃密な分布は、石器製作の場としての遺跡の性格の一端を明確に物語っている。島々が陸つづきであった当時において、見晴らしのよい高台という同様の条件下で、岩黒島だけが遺物の分布が希薄であるという特異な現象はどう

のように理解すべきであろうか。調査が行われた区域は、旧石器時代の岩黒島を知るうえでのほんのわずかな部分である。海面下に没したかつての陸地部にも、その答えを解くカギがかくされていることであろう。

(玉城)

注

- (1) 「仲多度郡史」 1918年1月
「香川縣神社誌」下巻 1938年12月
- (2) 香川県教育委員会「第4章 岩黒島の調査」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告(II)」 1978年3月
- (3) 板東祐司ほか「備讃瀬戸海底の地質学的研究－その2－」『香川大学教育学部研究報告』第28巻第1号 1978年3月
- (4) 建設省道路局・近畿地方建設局「第3章 地質調査」「本州四国連絡道路調査概要報告書」上巻 136 p 1970年3月
板東祐司ほか「香川県地学のガイド」 1979年10月
板東祐司ほか「備讃瀬戸海底の地質学的研究－その1－」『香川大学教育学部研究報告』第28巻第1号 1978年3月
前掲書(注3)
- (5) 漢正雄ほか「特集 第四紀」「アーバンクボタ」 1975年3月



(1) 調査区より与島・羽佐島をのぞむ



第 1 図 岩黒島初田遺跡周辺地形図

第3章 調査の経過

昭和57年5月6日から8月17日にかけて、岩黒島初田遺跡の調査を実施した。予備調査の段階で予定されていた瀬戸大橋建設の本工事区域と、今回あらたに昇降道建設予定地等を加えた合計5,036m²がその対象地である。瀬戸大橋建設に伴うこれまでの一連の調査によって、備讃瀬戸の島々には多くの旧石器時代の遺跡が分布し、それらは丘陵尾根筋を中心に展開していることが明らかになった。このような成果をふまえて、今回の調査では尾根筋を中心にA・B・C3地区にわけて調査区を設定した。初田遺跡では、予備調査によって遺物の密集度が低いことが指摘されており、調査の主眼は、遺物集中箇所の検出におかれた。調査は諸事情による中断期間をはさんで、約3ヶ月を要した。

(中本)

調査日誌抄

昭和57年

4月20日	調査予定地の下見のため渡島。地表にサヌカイトの散布はほとんどみられない。	7月2日	耕作土除去作業開始。
4月30日	岩黒島事務所に物品を搬入。	7月8日	B地区写真撮影終了。
5月6日	現場作業開始。初田神社移転予定地及び参道予定地の伐開作業を開始。	7月9日	C地区掘り下げ終了。清掃後、写真撮影。
5月7日	A地区の調査区設定作業開始。	7月18日	連日の降雨により作業停滞。トレンチ冠水による壁面崩壊の修復に手間どる。
5月12日	A地区・g～i列-9～10区の耕作土除去作業。	7月19日	B地区での作業全て終了。
5月17日	i列-7区の耕作土層より、古鏡などが出土。	7月22日	C地区・T ₃ 土層断面実測終了をもって神社移転予定地を除く現場作業を終える。
5月28日	土層確認のためa～b列-12区掘り下げ。	8月11日	本日より、初田神社移転予定地(地区T ₄)の調査を開始。
6月9日	L列-9区の第2層より、「道光通宝」が出土。A地区的発掘作業終了。引き続きB地区の伐開作業を開始。	8月13日	C地区T ₄ ・北東部分に緩い落ち込みを検出。遺物は皆無。
6月14日	A地区清掃後、写真撮影。	8月16日	C地区T ₄ の掘り下げ終了後、写真撮影。引き続き土層断面実測作業。
6月15日	B地区の調査区設定作業。	8月17日	埋め戻し終了。現場作業を全て終える。
6月16日	B地区調査前、全景写真撮影。	8月19日	調査事務所撤収。
6月17日	d～f～9区の掘り下げ。15cm程度で地山に達する。		
6月24日	A地区上層断面実測。		
6月28日	i列-4区より、須恵器片・土師器片出土。遺構は存在せず。		
6月29日	h～i列-3～4区の掘り下げ。清掃後全景写真撮影。		
6月30日	C地区的伐開作業開始。併行して、B地区、i～h列-3～4区の写真撮影。		
7月1日	B地区・c～d列-9区・i～j列-13～14区・i列-3～5区を1m×4mの範囲で掘り下げ。併行して、C地区的調査区設定作業。		



(2) 伐開風景

第4章 調査区及び土層

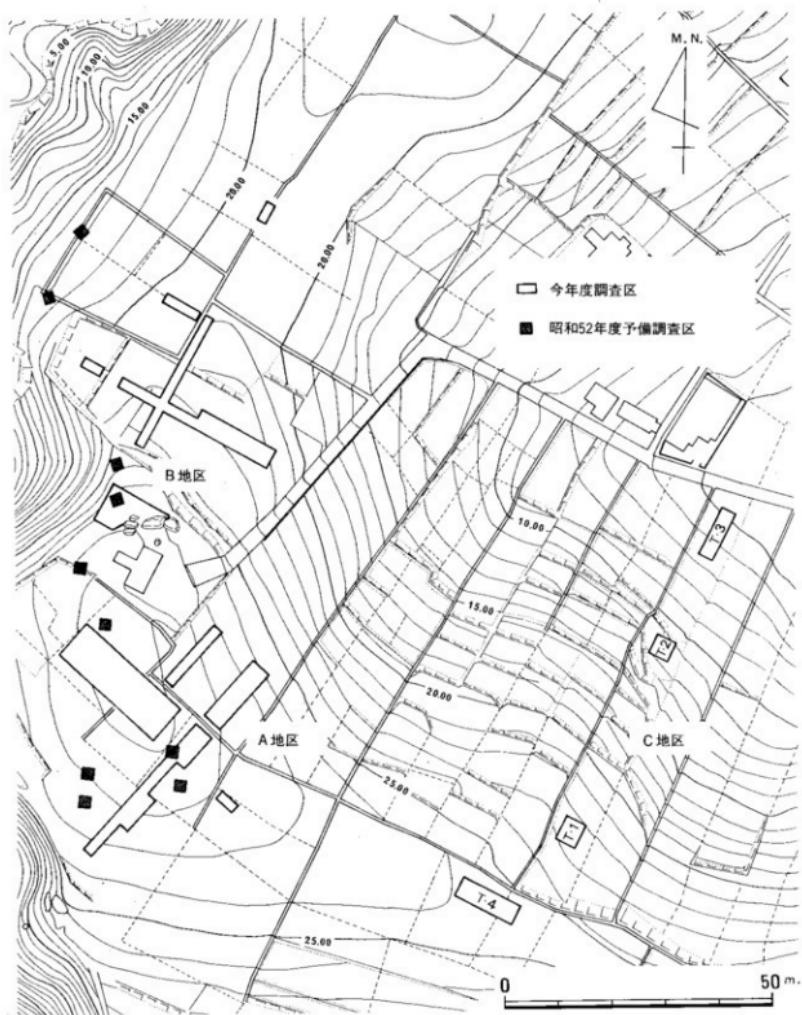
昭和52年度に初田神社周辺部で予備調査を実施している。 $2 \times 2\text{ m}$ のトレンチを10箇所、計40m²の調査面積である。予備調査によると、神社西南部を中心に旧石器時代の遺物が散布する量的にはさほど多い量ではない。予備調査を実施した昭和52年当時には工事予定地域が架橋の本工事部分だけを対象としており、調査対象面積は1,000m²となっていた。しかし、その後、進入路となる昇降道が建設されることとなり、大幅に発掘調査対象地域が増加した。また工事予定地域内に初田神社があり、その移転地も含めて今回調査を実施することとなった。調査対象面積は5,036m²である。そのため新たに調査対象となった地区では予備調査的な性格を加味した調査となった。

瀬戸大橋関係の調査により、実態が明らかになってきた旧石器時代の遺跡には、与島西方遺跡、羽佐島遺跡、花見山遺跡、大浦遺跡などがある。西方遺跡A地点、羽佐島遺跡では遺物の密集が異常なほど顕著に認められた。丘陵部の尾根筋を中心として、西方遺跡A地点では、10数万点、羽佐島遺跡では20数万点にも及ぶ膨大な量の遺物が出土した。遺物中には石核・素材・剥片などが含まれることから、石器製作に伴うユニット等の石器群のまとまりが限定された地域内に幾重にも重なっていると考えられる。内容的には各時期の良好な遺物が出土している。しかし花崗岩バイラン土上に遺跡が立地し、層位は花崗岩の風化度により分層されるだけで、周囲が急峻な斜面で囲まれるという地形的な制約から火山灰などの二次堆積は認められず、層位は時期差を反映していない。層位を超えて各期の遺物は包含される。遺物の異常な密集と層位の不明確さは石器製作が行われた遺跡にもかかわらず、ユニット等の同時性を有した石器群の検出には非常な困難さを伴うという欠点がある。

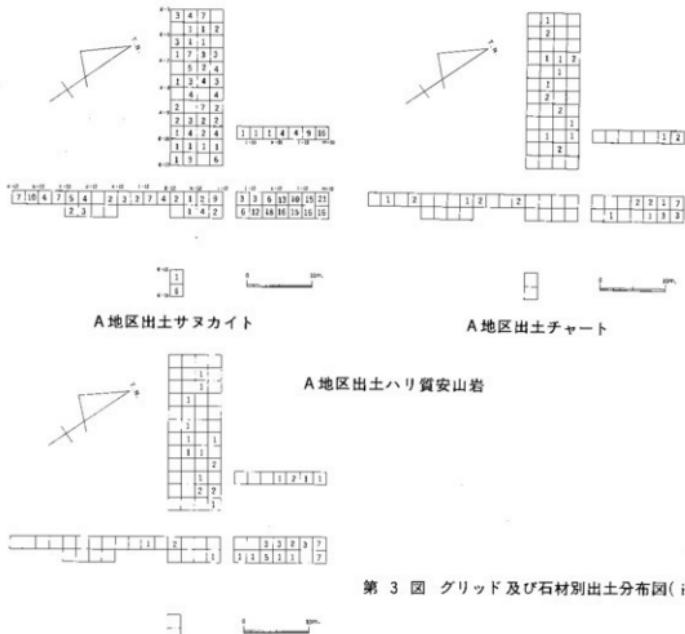
岩黒島初田遺跡は標高29mを計る三角点を中心として、なだらかな尾根筋からなり、岩黒島のすぐ南に位置する標高32mを計る羽佐島と類似した地形を呈する。両者は地理的な近接性と、地形的類似性を有しているにもかかわらず、遺物の出土量に大きな隔たりが認められる。量的には少ないが初田遺跡からもナイフ形石器・フレイク・チップなどの遺物の存在が予備調査で確認されていることから石器製作が行われたのは事実であろう。遺物の密集度の低さは、層位的な不明確さはあるにしろ单一時期の石器群が比較的容易に抽出できる可能性が想定された。

1 調査区の設定

こうした状況をふまえて、初田遺跡の調査にあたっては、石器の集中箇所の検出に調査の主眼を置いた。予備調査で旧石器が出土した初田神社西側の尾根筋は、ほぼ全面に近い面積を調査することとした。また地形を生かした調査区の設定を意図し、尾根筋の方向に従ってグリッドを配置した。そのため調査対象地を三分割し、初田神社の南部をA地区、神社北部をB地区、神社移転予定地をC地区とした。いずれも4m方画のグリッドを組み、各グリッドはA地区では北西隅、B地区では南西隅の杭のポイント番号で示している。遺物集中のきざしが認められるまでは、土層毎に遺物を一括して取り上げることとした。また2m方画毎の細かな遺物密集度のチェックが可能なように1グリッドを四分割して遺物を取り上げ、2m方画の各単位は、



第2図 発掘区位置図



第3図 グリッド及び石材別出土分布図(i)

基準杭を中心として右回りにイ、ロ、ハ、ニで表わした。C地区はトレンチを4箇所設定、状況把握に努めた。

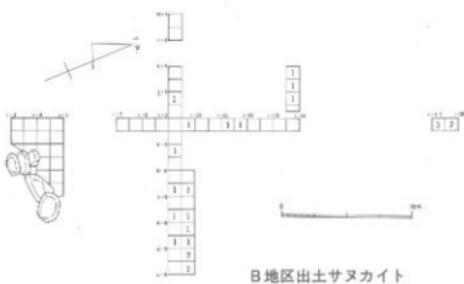
2 土層序について

備讃瀬戸の島々は基盤が花崗岩で形成されており、その丘陵尾根筋に立地する旧石器時代の遺跡では、花崗岩の風化バイラン土層中に遺物は含まれる。遺物包含層は風化的程度、もしくは擾乱の有無でしか分層できず、層位は時期差を反映していない。風化が下層から上層へと漸移的に進行するバイラン土層の中には時期差を持つ遺物が混在して包含されている。岩黒島初田遺跡も基本的には他の島嶼部の旧石器時代の遺跡と同様である。ただし島名からも推察されるように岩黒島の北部には、与島・羽佐島と異なり黒味を帯びた花崗岩が分布する。そのため島の北西部の砂浜は「黒浜」の名がつくほどである。島の南部、初田遺跡のA地区では与島・羽佐島と共にした花崗岩が基盤となっている。神社北部のB地区は尾根筋を中心に暗褐色を呈する粘質土層が広がっており、地山層となる。またB地区の北に位置する岩黒小学校の西の丘陵部には赤褐色を呈する土層が広く分布する。丘陵部においては基盤となる層に、かなりの差異が認められる。一方、A地区の東に位置するC地区の北斜面部の尾根筋寄りに設定した第1トレンチでは、地山層として灰白色を呈する土層が、また斜面下部の第2・第3トレンチでは

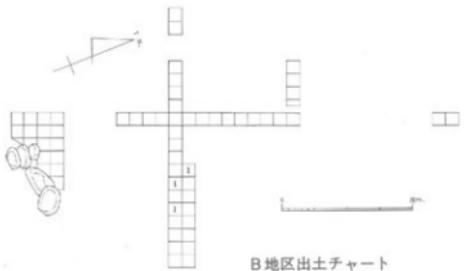
灰緑色を呈する土層が認められるなど、地点によりその様相には差がある。

このように初田遺跡においては各地区にそれぞれ異なった基盤層が分布しており、その上部に位置する遺物包含層にも差がある。しかしB地区・C地区は遺物の散布も希薄であり、煙地化する際にかなりの削平を受けている。そのため遺物の集中箇所は現在残存していない。遺物が比較的まとまって出土したA地区は、与島西方・羽佐島遺跡と同様に風化した花崗岩のバイラン土層から遺物が出土する。しかしA地区でも最も遺物の出土が期待された尾根筋は後世の削平が著しく、耕作土の下は地山層となり包含層は消失していた。その結果、包含層は尾根筋の周辺部でわずかに認められるのみであった。

(藤好)



B地区出土サヌカイト



B地区出土チャート

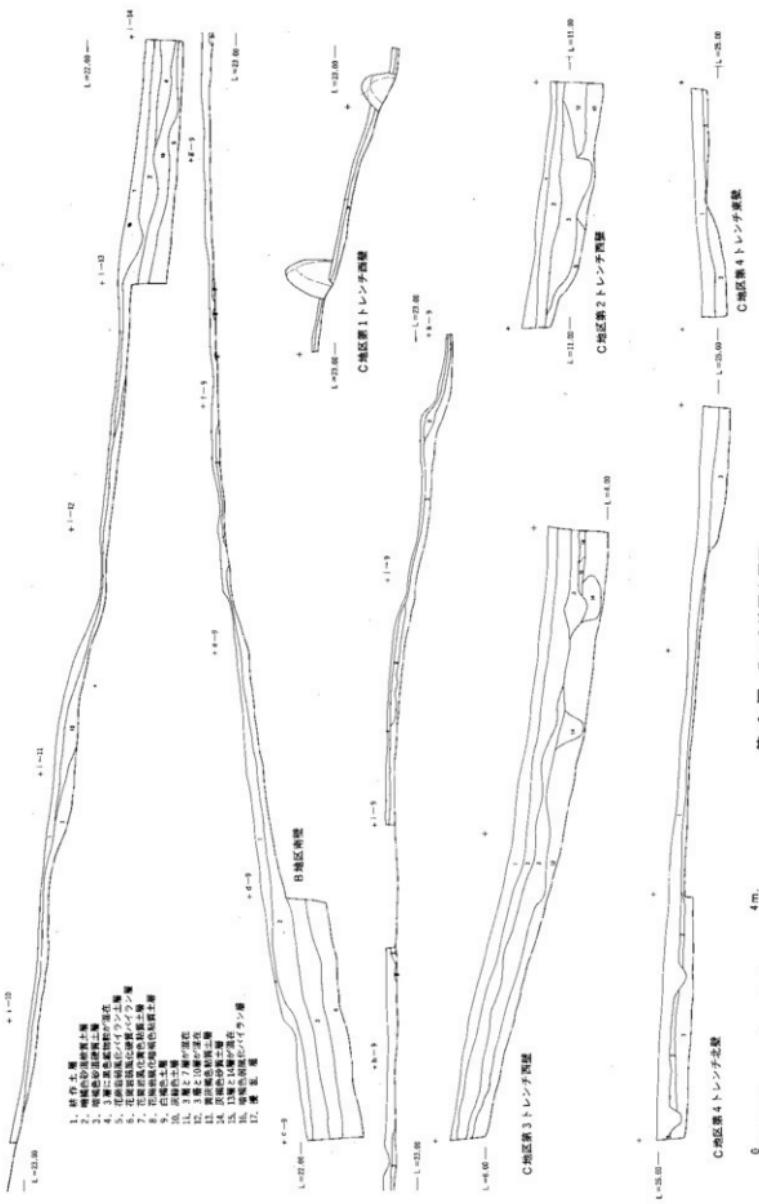
第4図 グリッド及び石材別出土分布図(ii)



(3) 作業風景



第5图 A·B地区土壤图



第6図 B・C地区土層図

第5章 出 土 遺 物

岩黒島初田遺跡から出土した遺物は旧石器時代から近・現代に及ぶものである。調査による遺物出土点数は総計600点ほどである。旧石器時代の遺物としては、ナイフ形石器・翼状剝片・横長剝片・横長剝片石核・縦長剝片・舟底形石器・石錐・彫器・スボール・細石刃・細石刃核などが出土している。石器及び重要性があると考えられる剝片などは全て写真図版で報告し、そのほとんどの実測図は挿図中に掲載した。遺物の出土状況が各調査区内でまとまりを有したものではないことから、出土地点別ではなく遺物中心に掲載しており、それに準じて報告する。

1. ナイフ形石器 (図版第7-1~15, 第7図-1~15)

初田遺跡出土のナイフ形石器はその破片と考えられるものも含めて15点を図化した。サヌカイトを石材として用いており、その大半が横長の剝片を素材とする。

1~3. 出土した他のナイフ形石器と比較するとやや大形のものである。1は国府型ナイフの条件を比較的充たすものである。素材となる翼状剝片の主要剝離面の打点と主要なネガティブな打点の位置がわずかにずれるものの、出土した他のナイフ形石器とは、やや様相が異なる。2は背面にわずかに主要なネガティブな面を残す、厚手のナイフである。基部は欠損している。3は断面が三角形を呈するやや厚手のナイフ形石器である。基部は欠損する。

4~7. やや小形のナイフ形石器である。4は断面が三角形を呈する。5は主要なネガティブ面が基部方向にずれる。6は腹面に打面調整の際の剝離痕を残し、背面に複数の小さなネガティブ面を残す。7は6のナイフ形石器と類似するが、背面に切り合わない先端と基部に離れた二面の主要なネガティブ面を残す。

8. 不定形な薄手の横長剝片を素材としたナイフ形石器である。プランティングは背面側から施されており、島嶼部の旧石器遺跡でよく認められる縦長剝片と同様な白色に風化したサヌカイトを用いている。

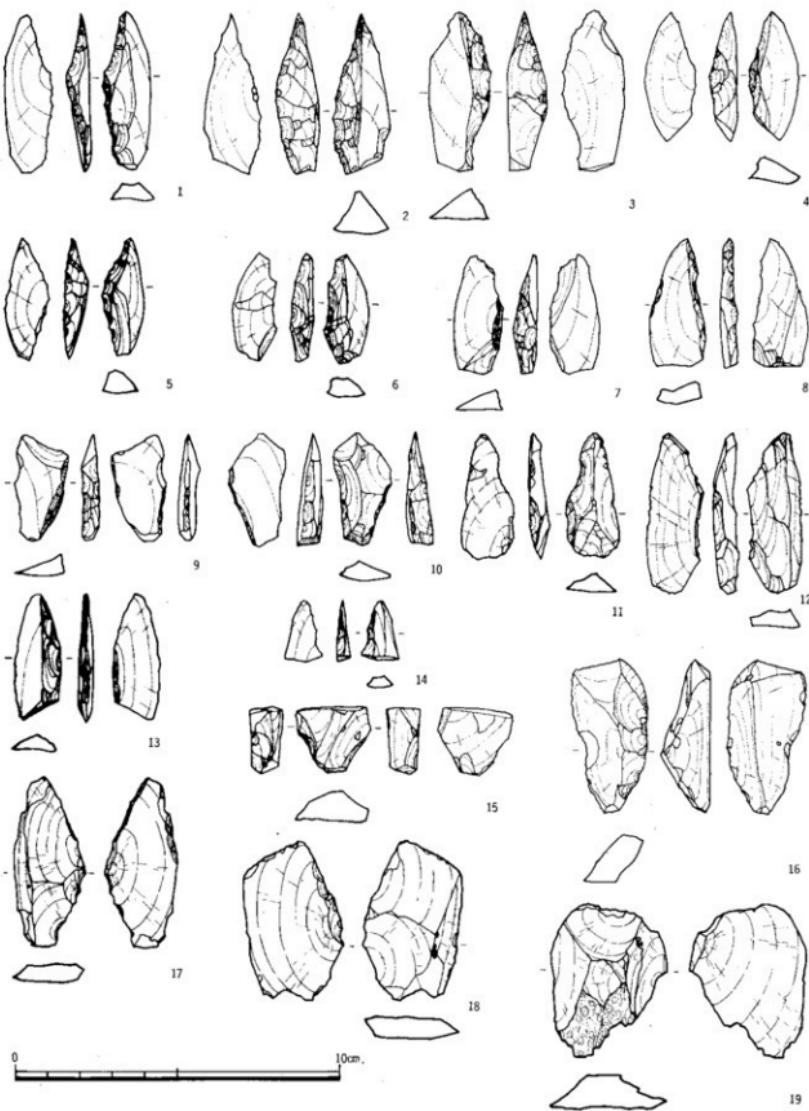
9~10. 切り出し形を呈するナイフ形石器である。いずれも横長剝片を素材とする。打点部と刃部にプランティングが施される。刃部は備讃瀬戸の国府型ナイフの系譜に連なるものと異なり、素材となる剝片の主要剝離面の打点に隣接する側縁を刃部とするものである。

11. 縦長剝片を素材とするナイフ形石器である。基部に主要剝離面からの細かい剝離による二次調整が施される。

12. プランティング部が主要剝離面からの加撃による折れたような面から成るナイフ形石器である。比較的大形のもので、背面に残る主要なネガティブ面は二面から成り、その剝離痕は乱れている。

13. 黄褐色の安山岩を用いた横長剝片を素材とするナイフ形石器である。プランティング部はつぶれたような小さな剝離面から成る薄手のものである。

14~15. ナイフ形石器の破片と考えられるものである。14は腹面からプランティングを施したナイフ形石器の先端部である。15はやや大形のナイフ形石器の基部と考えられる。底面は腹面からの大きな剝離痕によって形成される。



第 7 図 初田遺跡出土石器実測図(i)

2. 横長剝片 (図版第8-1~5, 第7図16~19・第8図-1)

いずれもサヌカイトを素材とするもので、5点図化した。

16. 底面の幅が先端と基部で異なる翼状剝片である。主要剝離面の打点と、主要なネガティブ面の打点が近接するものである。

17. 背面に二面から成る主要なネガティブ面を残す横長剝片である。細かい剝離痕からなる打面調整が施され、正面形が底辺の広い三角形を呈する、形の整ったものである。

18・19. やや不定形の横長剝片である。19は背面に一部自然面を残すもので、石核調整（打面調整）の際に生じた剝片の可能性があるものである。

3. 横長剝片石核 (図版第8-6・8, 第8図-2・3)

いずれもサヌカイトを素材とするもので、半分ほど欠損している。2は石核調整（打面調整）部と作業面が剝離角や剝離痕の形状から明確に分かれるものである。作業面では目的剝片の剝取が並列して行われたものであろう。

4. 舟底形石器 (図版第8-7・9, 第8図-4・5)

サヌカイトを石材とするもので二点出土した。4は大形のもので先端と基部が欠損している。甲板面は自然面と横方向からの複数のネガティブ面から成る。断面は台形状を呈する。5は小形の横長剝片を素材とするものである。甲板面からの二次調整が施され、特に先端部に細かい調整が認められる。

5. 石錐 (図版第8-10, 第8図-6)

刃部は片方の側縁にのみ調整を施しており、他方の側縁は素材の剝離面をそのまま用いている。基部よりの両側縁には一方向からの調整が認められる。サヌカイトを石材に用いている。

6. 彫器 (図版第8-11, 第8図-7)

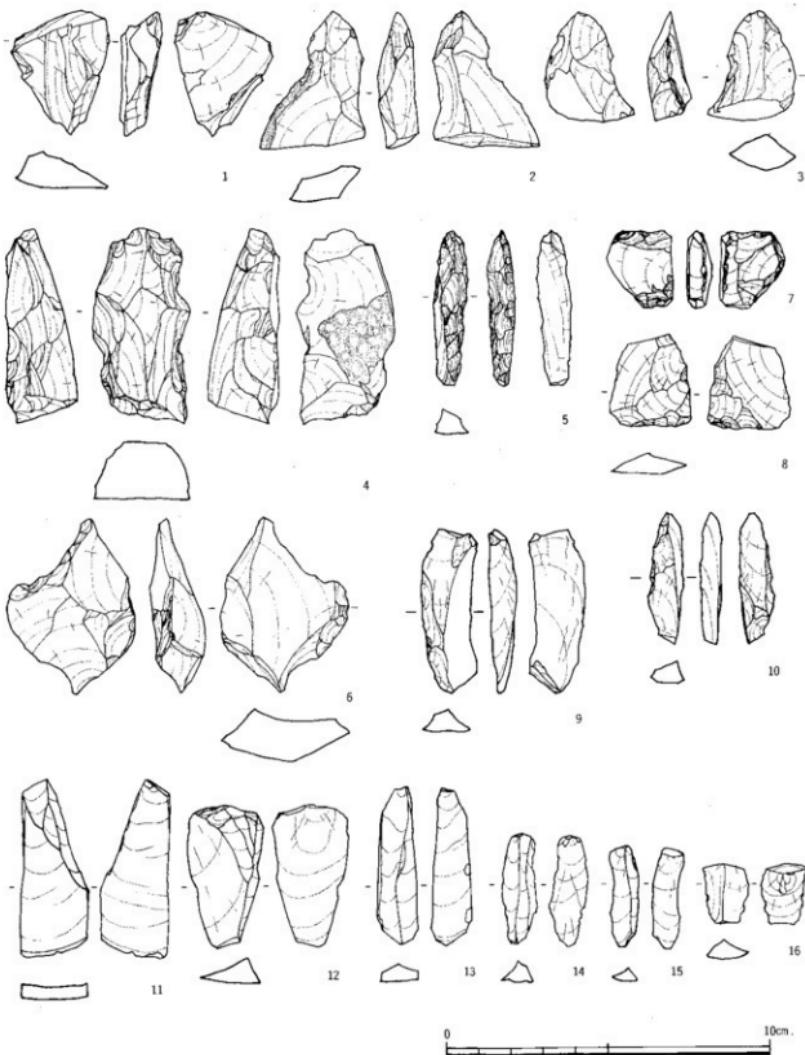
サヌカイトを石材として用いた小形のものである。縁辺は細かな階段状を呈する剝離痕で調整されている。一側縁は截断され、縦長のネガティブな剝離痕が認められる。截断面の側縁には、使用痕と考えられる細かな剝離痕がある。

7. 尖頭器 (図版第8-12, 第8図-8)

サヌカイトを石材として用いたもので、素材となる剝片の剝離痕を広く残している。調整は、基部と隣接する一側縁に集中的に施されている。やや大形ではあるが石錐の可能性も考えられる。

8. スポール (図版第8-13, 9-1, 第8図-9・10)

サヌカイトを石材とした両面加工石器がスポール状に剝離したものである。9はやや大形で、片方の側面は両面加工石器の素材となる剝片の剝離面を残す。10はやや小形のものである。



第 8 図 初田遺跡出土石器実測図(ii)

9. 縦長剝片（図版第9-4・5・7・9～11、第8図-11～16）

11～13. 白色に風化したサヌカイトを石材とする、やや大形の縦長剝片である。11は一方の側面に石材の節理面を利用した石核のきわめて平坦な面が残存する。他方の側面は欠損しており、当初の剝離面が残っていないが、平坦な面が存在したものと考えられる。12は平坦な側面が一面残存するもので、石核の正面に対して斜めに剥ぎ取られたものである。断面は三角形を呈する。13はやや細身の縦長剝片で、両側面に平坦な石核の面を残す。

14～16. 小形の縦長剝片である。15は白色に風化したサヌカイトを石材とし、平坦な側面が一面残存する断面三角形の縦長剝片である。14はややキメの荒いサヌカイトを素材とする、断面台形状の縦長剝片である。16は普通のサヌカイトを石材とし、他の縦長剝片とはやや様相を異にするものである。

以上が初田遺跡から出土した細石器以外の旧石器遺物である。各石器の様相は均一なものではなく、単一時期の所産であるとは考えにくい。各器種の内容と器種間の関連についてみてみたい。なお、末尾に掲載した岩黒島東部の砂浜で採集した旧石器遺物で一部補足する。

初田遺跡から出土した石器の中で、ナイフ形石器とその素材及び、素材を剥取された石核について述べる。初田遺跡から出土したナイフ形石器には形態差が認められる。国府型ナイフ（第7図-1）、断面形が三角形を呈するもので初田遺跡出土のものの中では比較的大きめのもの（第7図-2・3）と小形のもの（第7図-4）、切り出し形のナイフ（第7図-9・10）、縦長剝片を素材とするもの（第7図-11）などがある。各ナイフ形石器には素材となる剝片の剥取法や大きさ、プランティング等の二次調整の施し方に差がある。素材となる剝片の中では縦長剝片で可能性を有するものの出土を見ず、横長剝片について述べる。出土した横長剝片は大別して3種類ある。やや厚手の感がある翼状剝片（第7図-16）・主要なネガティブ面が2面からなり、細かな打面調整痕を残す横長剝片（第7図-17）・石核調整（打面調整）の際、生じたと考えられる不定形な横長剝片があげられる。横長剝片石核で初田遺跡から出土したものは、やや小形のもので約半分が欠損している。残存部による観察では、剝離角や剝離痕の形状など作業面と石核調整（打面調整）面に明確な差があり、一側面を作業面とするものである。作業面の剝離痕は現存するものは1面だけであるが石核が半分ほど欠損していることを考慮に入れると作業面である一つの側面に複数の目的剝片の剝離痕を有するものであろう。この石核は作業面において目的剝片が並列に剥取されたことを示すものである¹¹⁾。初田遺跡からは出土していないが、同じ岩黒島内の東部の砂浜から翼状剝片石核を転用したスクレイパー（第14図-2）を採集した。石核の部分に着目すると目的剝片の剝離痕と石核の幅がほぼ一致する。翼状剝片を剥取した後、やや難な石核調整（打面調整）を再度施しているにもかかわらず、翼状剝片を剥取せずにスクレイパーに転用している。そのために目的剝片の剝離痕の打点は消失している。

以上が岩黒島から出土しているナイフ形石器・素材となる横長剝片・石核の状況である。初田遺跡出土の国府型ナイフ（第7図-1）はポジティブな主要剝離面と主要ネガティブ面の打点にやや「ずれ」が認められるものの素材は翼状剝片の要素をかなり充たすものである。出土した翼状剝片（第7図-16）は幅4.8cmを計り、国府型ナイフの幅4.9cmとほぼ一致するものである。また海岸部で採集した翼状剝片石核の目的剝片の剝離痕は幅5.7cmを計り、近似するものである。検出した地点の相異はあるものの典型的な瀬戸内技法によるものとすることができよ

う。一方出土した横長剝片石核に残る目的剝片剝離痕は現状で2.8cmの幅を有するが、これは石核が欠失しているため剝離痕も一部欠損している。そのことを考慮に入れれば出土した小形ナイフ（第7図-4～7）が4cm弱の幅を有することとそれほど矛盾するものではないであろう。また小形ナイフの中には主要ネガティブ面が基部方向へ大きくずれたもの（第7図-5）や先端と基部に分かれて残るもの（第7図-7）があるなど、素材となる横長剝片が得られる際に打点が大きく移動しながら剝取されたことが窺われる。これは出土した翼状剝片や翼状剝片石核とは大きく異なるもので、前出の横長剝片石核や交互剝離石核から剝取されたものとしなければならない。また切り出し形ナイフ（第7図-9・10）に残存する素材となる剝片の剝離痕は、翼状剝片や出土した小形ナイフとも異なる。しかも刃部の位置が素材となる剝片の打点位置と隣接する側縁を刃部としており、国府型ナイフの伝統を引くナイフ形石器の刃部位置が剝片の打点と対置する縁辺に位置するものと大きな隔たりがある。切り出し形ナイフにはハリ賀安山岩や黒曜石を素材とするものがあり¹²、細石器に伴う新しい時期に属する可能性が高い。この時期は細石器という新しい技法や黒曜石に代表される石材が備瀬瀬戸に波及し、持たらされた時期であり、必ずしも切り出し形ナイフの全てを国府型ナイフの系譜で理解する必要はないであろう。また黄褐色の安山岩を石材とする薄い不安定なプランティングを施したナイフ（第7図-13）が出土している。この石材は与島西方遺跡では切り出し形ナイフに石材として用いられていたり、細石器が多数出土した櫃石島大浦遺跡では大形ではあるが縦長剝片的な素材を用いたナイフの石材として利用されるなど注目されるものである。

縦長剝片を素材としたナイフ形石器（第7図-11）が出土しているが、基部に調整を有するもので前出の大浦遺跡などで各種の石材を用いたものが出土するなど、今後他の地域と比較検討する際注意すべきナイフ形石器である。このように初田遺跡では点数こそ少ないが時期差を有するナイフ形石器が出土している。

上記以外の石器として石錐（第8図-6）・彫器（第8図-7）・スパール（第8図-9・10）について補足しておく。

出土した石錐はその形態が櫃石島花見山遺跡出土のものとよく類似するものである。初田遺跡出土のものは尖った先端部の一側縁を片面からの調整で、他の側縁は素材の縁辺をそのまま利用しているのに対して、花見山遺跡出土のものは両側縁に片面から調整を施している点が異なる。それ以外の形態や刃部以外の広がった側縁に調整が施されるなどよく類似したものである。

彫器としたものはサスカイトを石材とする剝片の縁辺に両面加工的に細かな階段状剝離による調整を施したものである。截断部はネガティブな縦長の剝離痕を残す。截断部の一側縁には使用痕と考えられる剝離痕が認められる。通例の彫器とは刃部の位置が異なるものである。大阪府と奈良県に及ぶ二上山北麓の旧石器時代遺跡群出土のもので「截断面ある石器」として報告されているものと比較するとやや小形ではあるが、同様のものであろう。

スパールとしたものは両面加工石器が縦長剝片的に剝離したものであり、石核との関係よりポイントや石槍との関係を考えた方が良いかもしれない。

（中本・藤好）

注

- (1) 細石器文化期に用いられる石材としてハリ賀安山岩がある。この石材は横長剝片を交互剝離技法により剝取した石核（交互剝離石核）の石材として用いられる。交互剝離技法は少なくとも細石器文化期と

一部は併行する時期まで下るものである。瀬戸内技法と交互剥離技法との間には大きな隔たりがあり、両者をつなぐものとして、第8図-2の横長剥片石核に認められる「打面調整並列剥離技法」とでも呼ぶべき技法の存在が考えられる。藤好史郎「国分台出土の石核」『香川史学 第10号』香川歴史学会 1981年6月

- (2) 香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告(Ⅰ) 与島西方遺跡』1979年3月で報告されている図版5-21, 図版6-7・8のナイフがそれにあたる。

10. ハリ質安山岩製細石刃核 (図版第10-1~6, 第9図-1~6)

ハリ質安山岩は60点出土した。そのうち細石刃核は7点であり、6点図化した。

1. a面は素材の主要剥離面であり、ポジティブな面で形成されている。打面は一回の打撃によるものではなく、いくつかのネガティブな面からなり、基部はa面からの細かい調整によって尖っている。作業面(b面)は逆三角形を呈し、5面のブレイド剥離が認められる。中心の幅5mm(最大部分)のものが最終剥離と考えられるが、剥離痕は相対的に明瞭さを欠く。

2. a面に自然礫面を残し、打面は右奥方向からの加撃によるネガティブな一面で形成されている。基部はa, c両面からの調整によって尖る。c面にみられるネガティブな面の打点は近く、b面の細石刃剥離後に施された可能性が高い。また、c面上縁にみられる細かい剥離は側面の調整としては意味をなさないことから、あるいは第2の作業面を意識したものとも考えられる。作業面はb面一面で逆三角形を呈し、5面の細石刃剥離が認められる。

3. ほとんどネガティブな面で形成され、側面の調整はさまざまな方向からなされている。打面はa面側からの一回の加撃によるものである。細石刃の剥離が進んでいるため打点はとばされてはつきりしないが、基部は主に右側面(c面)からの調整によって尖らせたものと考えられる。作業面(b面)は現状で5面の剥離痕が観察され、中心の幅4mmのものが最終剥離であろう。正面形は方形に近い台形である。

4. a面からb面にかけて連続する自然面を残す剥片が素材となっている。打面は一回の打撃によるネガティブな面で形成されている。打点は作業面(d面)の剥離が進むことによって欠落しているが、作業面側からではなく、側面からの加撃によるものの可能性が大きい。基部はa面側からの打撃によって尖る。作業面のブレイド剥離は3面であり、向かっていちばん右側のものが最終剥離であろう。幅4mmを計る。

5. a面は左方向からの打撃によるネガティブな面で形成されている。a面右側の右方向からの剥離は、2mm弱凹んだ不整形な自然面に対して作業面(b面)を整える目的でなされたものであろう。c面にはポジティブな面を残している。打面は左方向からの一回の加撃によって形成され、基部はa面からの一撃によって尖る。作業面の剥離は3面、中央の最大幅5mmのものが最終剥離と考えられる。正面形は台形を呈している。

6. 他と比べてややキメのあるハリ質安山岩を用いている。打面はb面方向からの打撃によって一面で形成され、基部はd面からの加撃によって尖る。作業面は図上ではb面とc面の二面に分けて入れたが、実際は弧状を呈する連続した一面という印象を受ける。作業面には4面の規則正しい剥離痕が認められ、b面左端の幅6mmを計るものが最終剥離面と考えられる。当初c面を作業面としていたのが、左側のb面へと作業面の転移が行われたものであろう。



第9図 初田遺跡出土石器実測図(iii)

11. 細石刃核調整剝片 (図版第10-7, 第9図-7)

ハリ賀安山岩を用いたものである。b面の一部にポジティブな主要剝離面を残すが、側面となる部分は主に上方からの加撃によるネガティブな面で形成されている。eの部分に打面の一部と考えられる小さな剝離面が認められる。基部と考えられるf面はb面方向からの調整によって尖っている。c面が作業面の一部であり、二面の剝離痕が認められるが、そのうち一面の打点はd面剝離時にとぼされている。d面が最終剝離面であり、この遺物は作業面再生の際に生じた剝片であると考えられる。

12. ブランク (図版第10-9, 第9図-8)

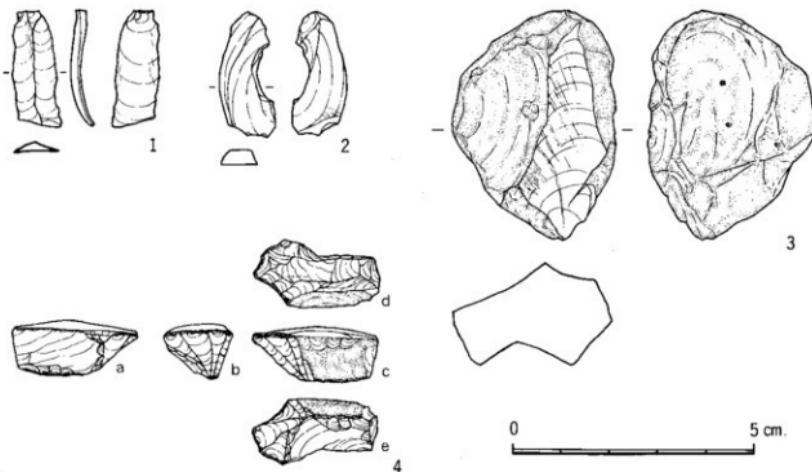
ハリ賀安山岩を用いる。一部に自然面を残し、ネガティブな面で形成されたブランクである。打面に相当すると考えられるd面は、c面方向からの加撃によって形成されている。側面はd面方向からのネガティブな面から成る。基部は細かい調整によってやや尖り気味となっている。b面が作業予定面と考えられる。細石刃を剥ぎとる直前のものであろう。

13. 細石刃 (図版第10-10, 第10図-1)

ハリ賀安山岩を用いた細石刃である。断面三角形を呈する薄く細長い剝片である。細部調整は認められない。

14. 二次調整横長剝片 (図版第10-11, 第10図-2)

二次調整を加えたハリ賀安山岩の横長剝片である。断面は台形状を呈す。



第10図 初田遺跡出土石器実測図(iv)

15. ハリ質安山岩原石（図版第10-16, 第10図-3）

原石である。一部にネガティブな剝離面が認められるが、ほとんど自然面から成る。長径4.7cm, 短径3.2cmのいびつな橢円形を呈する。

16. チャート質細石刃核（図版第11-1, 第10図-4）

チャートを素材としたものである。形態的には細石刃核としての特徴を備えている。一側面に自然面を残し、基部とみられる部分は細かい剝離痕によって尖っている。細石刃核とした場合の作業面はb面のみであり、逆三角形を呈している。打面にあたるd面に対してのブレイド剝離面は、ハリ質安山岩の細石刃核とは異なってかなり鋭角的になっている。b面には4面の剝離痕が認められる。

岩黒島初田遺跡の調査において確実に細石刃核と考えられるものはハリ質安山岩を素材としたものに限られ、櫛石島花見山遺跡⁽¹⁾や羽佐島遺跡⁽²⁾にみられるような黒曜石、サヌカイトを素材としたものは、今回の調査では得られなかった。

岩黒島から出土した細石刃核は、いずれも基部を尖らせるように調整したものであり、作業面の正面形は逆三角形もしくはそれに近い台形を呈している。打面は側面からの加撃によってネガティブな面で形成された例が一般的であるが、一部側面から細かい調整を加えたものもある（第9図-1）。また、打面形成の際の加撃方向はすべて側面からに限られ、細石刃剝離面方向からの例は存在しない⁽³⁾。作業面は一面だけにとどめたものが多いが、左方向へと作業面を転移させた例も見受けられる⁽⁴⁾（第9図-6）。いずれにしてもブレイドの剝離痕は小さい。

次に原石について若干触れたい。出土した原石は長径4.7cmを計る橢円形のものである。花見山遺跡⁽⁵⁾、羽佐島遺跡⁽⁶⁾、島西方遺跡⁽⁷⁾で報告された原石も同程度の大きさ、形状のものが多く、長径5cm前後の小円礫から細石刃核をつくりだすことが一般的であったと考えられる。島嶼部から出土するほとんどの細石刃核が自然面を有し、またポジティブな面をもつものが多くみられる事から、小円礫である原石を分割して、細石刃核の素材となる剥片を得たものであろう。いずれにしてもランクの素材として、剥片は有効に使われたようである⁽⁸⁾。

初田遺跡から出土したチャートには、細石器に用いられるハリ質安山岩とは異なる様相が認められる。ここで島嶼部から出土したチャートについてみてみたい。

瀬戸大橋架橋に伴うこれまでの調査で、発掘された全ての島からチャートが出土しているにもかかわらず、その性格は不明瞭とされ、これまであまり論じられることがなかった。花崗岩から成るこれらの島々において、異石材であるチャートが何らかの使用目的によって運ばれたものであることは明らかである。しかし、サヌカイト、ハリ質安山岩などの石材が、明確に石器用材としての位置付けがなされているにもかかわらず、島嶼部におけるチャートは、石器として使用された明白な根拠をもっていない⁽⁹⁾。このことは、島嶼部におけるチャートの出土量が、他の遺物に比べて極めて僅少であるために「石器」の存在が確認できなかったと考えるよりも、他の理由に委ねられる要素が大きかった可能性を示すものと思われる。

今回の調査では、A・B・C各地区の、主に耕作土中より合計55点のチャートを検出した。色調は、青緑色、青白色、茶白色などさまざまである。このなかには充分ランクとなり得る素材も含まれる⁽¹⁰⁾が、ほとんどのチャートは稜の部分が潰れて透明感を失い、丸味を帯びてい

ることが特徴としてあげられる。これはハリ賀安山岩を素材とした細石刃核もしくはブランクと大きく異った点である。この点に着目してみれば、羽佐島遺跡、櫃石島花見山遺跡・大浦遺跡・ヤケヤマ遺跡、与島西方遺跡出土のチャートについても同様の状況が観察される⁽¹¹⁾。以上のことは、前述したように石器用材としてのチャートを考えるよりも、もっと他の使用目的があつた可能性を示唆しているものであろう。

細石刃核に含めたチャート（第10図-4）についても、作業面としたb面の上縁がb面全体にわたって潰れたようになっており、他の一般的なチャートにみられる稜の潰れ方と酷似した様相を呈している。これは前述したハリ賀安山岩を素材とする細石刃核にはみられない状態で、石材の違いを考慮しても細石刃剝離時に生じたとは考え難い痕跡である。また、仮にブレイドを剥ぎ取ったとしても、その後に作業面としたb面方向から側面に向かって細かい剝離が施されるのは不自然であろう。「細石刃核」と断定するには問題の多い遺物である。少くとも島嶼部に持ち込まれたチャートについては、その使用目的に、他の石材にみられない特殊性を見いただすことができる。チャートが使用された年代とも考え合わせて再検討する必要があろう。

（玉城）

注

- (1)①香川県教育委員会「III 花見山遺跡ホウロク石地区 第1次調査」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(III)」 1980年3月
- ②香川県教育委員会「IV 花見山遺跡の調査(第2・3次調査)」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(IV)」 1981年3月
- ③香川県教育委員会「羽佐島遺跡」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(II)」 1979年3月
- ④香川県教育委員会「II 羽佐島遺跡」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(III)」 1980年3月
- (3) 花見山遺跡、羽佐島遺跡では数回の加撃によって、あるいは作業面からの打撃によって打面を形成した例もみられるなど多様である。
- (4) 花見山遺跡ではものの打面に相当する面を第二の作業面に転移させた例が報告されている。
- (5) 前掲書(注1-①・②)
- (6) 前掲書(注2-②)
香川県教育委員会「IV 羽佐島遺跡の遺物整理」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(V)」 1982年3月
- (7) 香川県教育委員会「II 与島西方遺跡の調査(C₂地区)」「瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(V)」 1982年3月
- (8) 原石からブランクを得る工程は、藤好史郎氏が想定したB系統によるものがほとんどであったと考えられる。(藤好史郎「細石器」前掲書注2-②)
- (9) 島嶼部における調査報告書のなかで、チャート関係の「石器」とされた遺物は以下の通りである。(いずれも、実測図・写真は掲載されていない。)

遺物名	点数	遺跡名	備考
ナイフ形石器	1	花見山遺跡ホウロク石地区	『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(III)』
細石刃	1	大浦遺跡	〃 (IV)
細石刃核	1	花見山遺跡	〃 (IV)
スクレイパー	2	〃	〃 (IV)
石鐵	1	与島西方遺跡	(I)

第1表 島嶼部出土チャート関係「石器」一覧表

花見山ホウロク石地区の「ナイフ形石器」は、表土層から出土したものである。ナイフ形石器であるとすれば、先端部に調整を加えたタイプの下半部を欠損したものを想定すべき小片で、残存長1.6cm、幅1.3cm、厚さ1.1cmを計り、断面形は不定形な菱形を呈している。側縁は、背腹両面からの加撃による二面の大きな剝離によって、プランティング相当部を形成している。しかし、このようななかたちでの側縁部の形成は、他に例をみないものである。また、細かい剝離はみられるものの「調整剝離」とする根拠は認められないこと、さらにチャートが風化程度を認定しにくい石材であり、先端部の剝離は発掘時の欠損の可能性もあることなどから「ナイフ形石器」とする要素は乏しいものである。なお、この遺物は、縁辺部がまったく潰れていない。

花見山遺跡の「細石刃核」については、第11図に示した。形態的に「打面」に相当するのはd面であるが、「作業面」にあたるb面の剝離痕は、「打面」(d面)方向からの加撃によって生じたと考えられるものが現状でわずか一面だけである。他は下方からの打撃によって剥ぎ取られている。そのような状況をふまえて、仮に「基部」とした方に「打面」を想定すると、c面にあたる部分が相当する。しかし、この場合の「打面」と「作業面」のなす角度が45°という鋭角であり、剝離作業の進行にしたがって鋭角化していくとしても最終的には作業手順上、両者の関係は成り立ちにくかったと考えられる。ちなみにd面とb面の角度は約95°と安定している。観察結果から、核再生時の欠損は考えられず、押圧剝離には不適当な状態である。また、「作業面」の剝離後にa面方向からの意味をなさない剝離が認められ、「細石刃核」とするには不自然な点が多い。

花見山遺跡の「スクレイパー」は、青白色系、白色系の2点である。青白色系のものは、長径2.7cm、短径2.0cmの不整形な梢円形を呈し、断面は最大厚0.9cmのくさび形である。「刃部」にあたる部分には両面加工状の細かい剝離が認められるが、エッジは潰れて鈍くなっている。白色系のものは、全体の約1/4に欠損ともとれる部分があるが、長径2.7cm、短径2.3cmを計り、青白色系のものと同様の不整形な梢円形である。厚さ0.3~0.8cmで、断面はいびつな台形状を呈している。縁辺部には、ナイフ形石器のプランティングに通じるような細かい剝離が、欠損とも考えられる部分を除く全面に施されているが、エッジは潰れて鈍い。「石器」として報告されたチャートのなかでは最もその可能性が強いものといえる。

なお、大浦遺跡出土の「細石刃」については、実見の結果、等質で赤茶色を呈する緻密な石材を用いており、問題にしているチャートとは異質の石材であった。

10 ブランクになりうるとすれば、細石器関係を考えるのが妥当であろう。出土するチャートは一様に小さい。大きいものでも長径3cm前後の小円盤であることを通例としている。

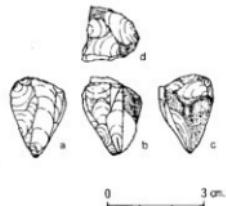
11 実見による。

17. 旧石器以外の遺物

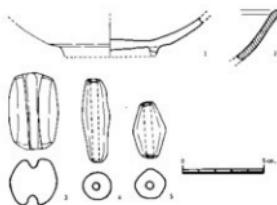
初田遺跡から出土した遺物の大半は旧石器時代に属する遺物であるが、少量ながらそれ以降の時代に属する遺物が出土している。

土器・土鍤 (第12図-1~3)

1. 土師器碗である。内外面ともに磨耗が激しく、高台内側にわずかに横ナデが観察できる程度である。退化した貼り付け高台をもち、明るい黄色がかかったクリーム色を呈する。砂粒の含有量は少ない。



第11図 横石島花見山遺跡出土石器



第12図 初田遺跡出土遺物実測図

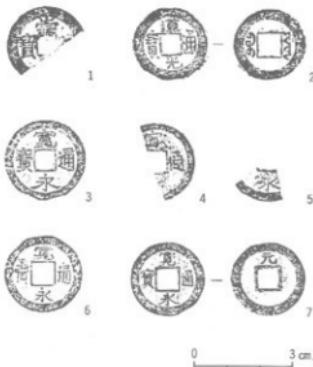
2. 瓦器の口縁部である。内外面ともに黒灰色を呈し、ヘラ磨き調整が認められる。

3. 瓦質の小形有溝土錘である。重量40gを計り、黒灰色を呈する。

4・5. 小形管状土錘である。重量は各々12g, 10gを計る。いずれも赤褐色で硬質の焼きあがりを示している。

古銭 (第13図)

出土した銅銭は、合計7点である。ほとんどが耕作中に含まれていたものであり、このうち1点は銭種を特定することができなかった。



第13図 出土古銭拓影

番号	銭種	出土地点	初鋳年代	
第13図-1	崇〇〇宝	A地区 i 7-ロ	I層	
2	道光通宝	A地区 19-ハ	I層	清 1821年
3	寛永通宝	B地区 i 3-ニ	I層	日本 1626年
4	〃	A地区 112-ロ	II層	〃 〃
5	〃	A地区 i 6-ハ	I層	〃 〃
6	〃	A地区 i 4-イ	I層	〃 〃
7	〃	B地区表採		〃 〃

第2表 出土古銭一覧表



(4) 作業風景

第6章 おわりに

岩黒島初田遺跡が旧石器時代の遺跡として実質的に認識されたのは、昭和52年度に実施した瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財の予備調査においてサヌカイトを素材としたやや不定形なナイフ形石器が検出されたことによる。予備調査の成果は昭和53年3月「第4章 岩黒島の調査」として『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財予備調査報告（II）』の中で報告されている。報告によれば、島の南西部の初田神社周辺の丘陵部と斜面部の4,200m²を対象として、その約1%にあたる40m²の発掘調査が行われた。2m方画のトレンチが10箇所に設定され、サヌカイト質のナイフ形石器が2点とフレイク・チップが少量、及びチャート質のフレイクが出土している。櫃石島・羽佐島・与島に所在する旧石器時代の遺跡における遺物の散布状況と比較すると岩黒島初田遺跡の遺物の散布状況は非常に希薄であることが判明した。報告者は遺跡の立地から遺物の量的少なさを、従来は存在した遺物が流出した結果によるものとしている。

予備調査を実施した昭和52年当時は瀬戸大橋建設に伴う本工事区域が決定されていたのみで、それ对付する進入路である昇降道や本工事区域内に位置する初田神社の移転予定地が未確定であった。そこで本工事予定地内で1,000m²を本調査対象地とし、その後決定した昇降道や神社移転予定地を含め、総計5,036m²を対象として今回の本調査を実施することになった。ただし予備調査で確定した本調査対象地である1,000m²を除き、予備調査を行わないまま今回の本調査に入ったことで、予備調査的な性格を有する調査となった地区もある。

岩黒島初田遺跡の本調査は昭和57年5月6日から同年8月19日にかけて実施した。ただしこの期間中には神社移転予定地の調査へスムーズに移れず、遺物整理作業を実施していた20日程の期間を含んでいる。

初田神社周辺の地域で旧石器時代の遺物の散布が他の島々に立地する旧石器時代の遺跡と比較して希薄なものであることは予備調査の結果からある程度予測されていた。また予備調査以後与島・羽佐島・櫃石島の各旧石器時代の遺跡群の本調査が昭和52年の与島西方遺跡の調査を皮切りに実施され、その内容が判明してきた¹¹⁾。与島西方遺跡A地点や羽佐島遺跡においては両遺跡合計して数10万点に及ぶ遺物が出土している。その膨大な点数に上る旧石器時代の遺物が限定された尾根筋を中心として散布している。遺物量の多さは当時使用された石器の各形態のものが出土遺物中に包含されている可能性が高く、量的処理をするには絶好のものである。しかし逆にその遺物が非常に狭い範囲に限定された箇所から層位的に分割されることなく、異常な密集度で出土することから生じる問題を含んでいる。出土する石器の多くは石器製作時に生じたフレイクやチップ類であり、石核も數多く認められる。両遺跡が石器製作の場であることは間違いない。石器製作の際生じるユニットなどの同時期性を有した石器群が異常に重複した結果が西方A地点や羽佐島遺跡の状況であろう。しかも狭い尾根筋であることから火山灰等の降下堆積層の形成には不向きであり、石器群は花崗岩バイラン土層中に時期差や内容の差を反映することなく一括して包蔵される。この状況は出土する石器を石器群ごとに抽出することが不可能に近いことを物語っている。瀬戸内地域において旧石器研究の困難さの原因の一つとなっている。

こうした備讃瀬戸における旧石器時代の遺跡の現状下で、島嶼部の旧石器遺跡で期待し得る

のは重複しない单一時期の石器群の検出である。岩黒島は与島・羽佐島・櫃石島等の旧石器時代の遺跡が集中する地域内に位置し、各遺跡間も相互に関連することが考えられる。初田遺跡はその最高所が29.2mを計る初田神社を中心としてなだらかな尾根筋とその周辺の緩斜面部に広がる。岩黒島のすぐ南に位置する羽佐島遺跡が標高20~30m前後のなだらかな丘陵部とその周囲の斜面からなっていることなど、初田遺跡には他の遺跡と共通する地形が認められる。また予備調査で確認されているようにフレイク・チップ類が石器と共に検出されることから石器製作が行われたことが判明している。遺物の散布状況も希薄であり、しかもかなり広いなだらかな尾根部があることから、石器群が重複している可能性は低い。单一時期の石器群が、多少の移動を受けているにしろ、一つのまとまりを有して検出できる可能性があるなど、異常に遺物が密集して出土する傾向を示す備讃瀬戸の旧石器時代遺跡の状況下では岩黒島初田遺跡の本調査は意義を有するものであった。

初田遺跡の本調査は石器群のまとまりを検出することに調査の主眼を置いた。調査対象地は地形を考慮に入れ尾根筋の方向をもとに3地区に分けて調査を実施した。実質発掘面積は678m²で、対象面積5,036m²の約13.5%に相当する。神社の北部のB地区と神社移転予定地のC地区はもともと遺物の分布が非常に布薄であったと考えられ、さらに畑地化するための削平が行われている。旧地形が比較的良好に残っていると考えられた丘陵部も遺物包含層が消失していたり、遺物がほとんど含まれないなどの状況を呈していた。比較的の遺物の出土に恵まれたのが神社の南部のA地区である。旧石器時代の遺物を中心として500点程が出土した。出土状況は他の島嶼部に立地する旧石器時代の遺跡同様、花崗岩バイラン土中に石器が含まれ、尾根部の周辺を中心で石器が出土した。尾根筋は削平のため包含層は消失しており、耕作土中から攪乱された状態で遺物の出土がみられた。遺物の出土が尾根部の周辺に偏るのは尾根部が削平を受けていることから当然のことである。その後尾根部に石器の散布が認められることから初田遺跡も他の遺跡同様に尾根筋を中心として、もともとは遺物が分布していたものであろう。遺物の出土は包含層が残存する尾根の周辺部から多く認められる。中でも初田神社の東側の尾根から斜面へ移行する途中の緩斜面部で比較的まとめて遺物が出土した。ナイフ形石器・細石刃核・フレイク・チップ・チャートなどである。ナイフ文化期と細石器文化期は一部併行すると考えられる⁽²⁾が、神社東斜面で出土したナイフ形石器には小形の横長剥片を素材としたものに比較的大形で底面と主要剝離面のポジティブ面のなす角度が大きい断面三角形を呈するものがあり、細石器と伴う可能性が低いものである。また遺物の密集度も低く、同一時期の石器群とは認定できない。尾根部の他の周辺における遺物の出土状況も、神社東部と比較すると量的にも少く、遺物集中を云々する程の状態ではなかった。

出土した遺物は総計600点程で、その大半が旧石器時代に属するものである。ナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片・横長剥片石核・縦長剥片・彫器・石錐・細石刃・細石刃核などが出土している。ナイフ形石器には細石器に伴う可能性が大きい小形のものや切り出し形のものが出土している反面、国府型ナイフの要素を有するものや厚手の断面三角形のものが出土している。その様相には差異が認められ、時期差を有すると考えられる。また出土した横長剥片石核は小形のもので作業面と石核調整（打面調整）面とが剝離痕においても、角度的にも明確に差があるものである。やや小形のものであるが翼状剥片も出土している。この翼状剥片と前記した横長剥片石核とでは認められる技法に差があり、同一時期に属するものではない可能性が高い。この横長剥片石核には剝離痕の大きさ等から小形のナイフと関連することが考えられる⁽³⁾。ま

た縦長剝片を素材とし基部に調整を二次的に施したナイフも出土している。与島西方A地点・羽佐島・大浦遺跡などでも同様なものが出土している。サヌカイトだけでなく黒曜石やハリ賀安山岩などもその石材として用いられており、比較的新しい時期の遺物であろう^④。今回の調査では細石刃・細石刃核が新たに検出され、予備調査で確認された時期よりは後まで初田遺跡が継続することが明らかとなった。細石刃・細石刃核は他の遺跡同様にハリ賀安山岩を石材とするものである。一部に石材の自然面を残す剝片を素材とし、作業面はほとんどが一側面だけを利用しており、その打面は側面からの加撃によるネガティブな面で形成される。細かな打点部の調整はほとんど施さないなどの特徴を有するものである^⑤。またこれまで細石器に併行する時期に多種類の石材が備讃瀬戸で用いられることが、チャートも莫然と細石器の石材として用いられると考えられてきた。初田遺跡から出土したチャートの中には細石刃剥取面とも考えられる剝離痕を残すものが出土した。ただ出土したチャートの大半はブランク的なものであり、周囲には細かいネガティブな剝離痕が認められる。しかし側縁部にはつぶれたような箇所が必ず認められ、ハリ賀安山岩を石材とする細石刃核もしくはそのブランクとは大きく様相が異なることが明らかとなった。材質による技法の差とも考えられるが、細石刃核やブランクには縁辺をつぶす調整は必要ではなく、別の機能を考慮に入れる必要が出てきた。また風化して白色を呈するサヌカイトを石材とする縦長剝片が出土している。この縦長剝片は島嶼部の旧石器時代の遺跡からは必ずと言って良いほど出土している。長い期間継続して使用されたものか、各遺跡が重複する期間に用いられたものか、現状では解明されておらず、問題も多い。

初田遺跡出土の石器は必ずしも單一時期の所産であるとは考えにくい。時期差を有する遺物群が希薄に散布しているのが初田遺跡の状況である。また後述するが岩黒島の東部に位置する砂浜で採集した遺物中には、大形の翼状剝片や翼状剝片石核が認められることから島内には初田遺跡以外にも旧石器時代の遺跡の存在が考えられ、遺物を採集した浜の位置から初田遺跡が立地する丘陵の東部にその可能性が高い。しかし地表の観察によれば、西方遺跡や羽佐島遺跡ほどの遺物の密集は考えられない。初田遺跡の遺物やその出土状況は単発的に石器製作が行われたことを語っているようであり、周辺の島々における遺跡の様相とは異っている。岩黒島の位置・初田遺跡の立地からすれば不可解な状況である。今後に残された課題は大きい。

(藤好)

注

- (1)①香川県教育委員会『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査報告（I）与島西方遺跡』 1979年3月
②香川県教育委員会「II 羽佐島遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（III）』 1980年3月
③香川県教育委員会「III 花見山遺跡ホウロク石地区 第1次調査』『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（III）』 1980年3月
④香川県教育委員会「IV 花見山遺跡の調査』『瀬戸大橋に伴う埋蔵文化財調査概報（IV）』 1981年3月
⑤香川県教育委員会「V 大浦浜遺跡の調査』『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報（IV）』 1981年3月ほか
- (2) 前掲書（注1-②）中、「細石器」で指摘したように細石器文化として細石刃・同石核の石材として使用されたハリ賀安山岩が小形の切り出し形ナイフに用いられたものが与島西方遺跡A地点で、また同石材を用いた横長剝片石核が羽佐島遺跡から出土している。
- (3) 藤好史郎「国分台出土の石核」『香川史学』第10号 香川歴史学会 1981年6月
ナイフ形石器の小形化と特に切り出し形ナイフに認められる二次加工の増加という変化は素材となる

剥片を得た石核に認められる技法の変化と無関係ではない。瀬戸内技法による一定した形状を有する翼状剥片を剥取した翼状剥片石核から、今回の調査で出土したような目的的剥片を剥取した作業面とそのための石核調整面が明確に翼状剥片石核同様に区別されながらも翼状剥片石核とは異なり、石核の幅と得られる目的的剥片の幅が一致しなくなる打面調整石核へと変遷していく。さらに作業面が石核調整を兼ね作業面が一側縁を境として交互に入れ替る交互剥離石核へと変化していくと考えられ、交互剥離技法による横長剥片石核はハリ質安山岩を石材として用いたものが羽佐島遺跡から出土しており、時期的には細石器文化期まで下る。今回の調査で出土した翼状剥片はネガティブな面とポジティブな主要剥離面の打点が左右に移動しておらず、剥片の剥取がほぼ一直線に後退したことが考えられる。この翼状剥片と出土した打面調整石核、切り出し形ナイフ・細石刃・同石核とは時期差を有するところができる。

- (4) 前掲書（注1-⑤）の大浦遺跡は細石器と比較するとナイフ形石器の出土量が少なくナイフ文化期の終末期から細石器文化期に属する遺跡と考えられる。また本文中に記載したように石材の種類の増加はナイフ文化の末期から細石器文化期にかけて認められる現象である。
- (5) 前掲書（注1-②）の羽佐島遺跡から出土した細石刃核の一部のものに認められるあたかもナイフのプランティング状の側面から施した打面や基部調整を施したもののは出土していない。

初田遺跡の調査の合間をみて、岩黒島の分布調査を行なった。地表の表面観察の結果では丘陵部にはそれほどの遺物散布は認められず、また馬蹄形の丘陵に挟まれた低地部では民家が密集しており地表の観察ができなかった。現在、坂出と下津井を結ぶ定期航路などの港となっている島東部の浜で遺物の散布が認められ、旧石器時代から近・現代に及ぶ遺物散布を確認した。特に初田遺跡で出土をみなかった大形の翼状剥片や石核また縄文時代の土器片や石匙、弥生時代のサヌカイトを用いた様々な形態を有する打製の石庖丁・石鍬や土器及び古墳時代の製塙土器などを採集するなどの成果があり、岩黒島にも各時代にわたる人々の活動の痕跡が残っていることが明らかとなった。石器・石製品・土器・土製品の順で報告する。

1. 旧石器時代の遺物（図版第12-1～4、第14図1～4）

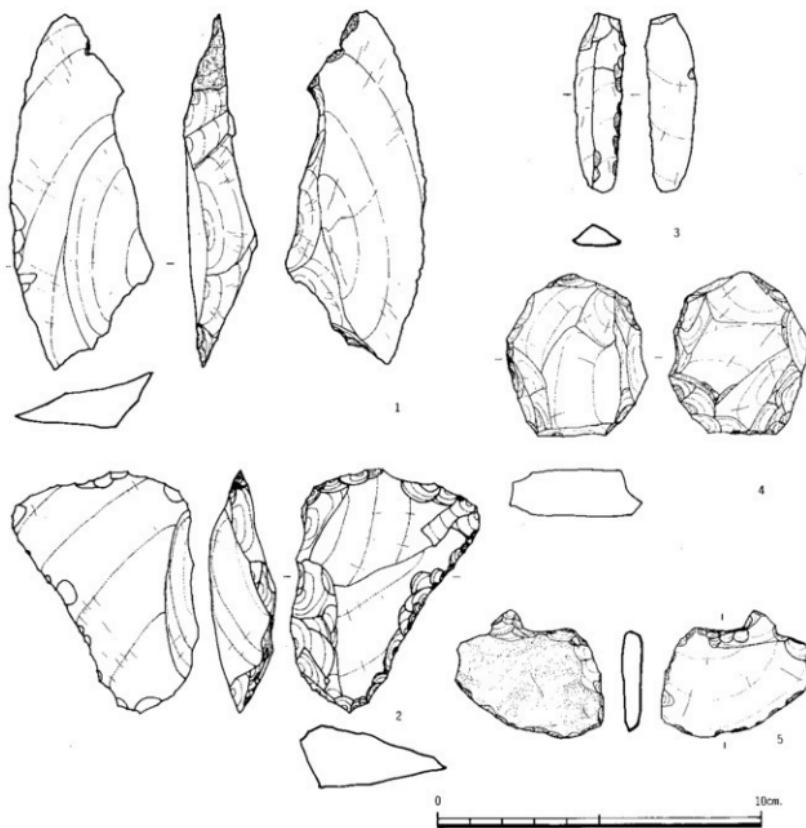
いずれもサヌカイトを石材とするものである。1は大形の翼状剥片である。用いられたサヌカイトはやや質の粗いものである。主要剥離面の打点はやや基部方向にずれる。打面調整部に一部自然面が残る。2は翼状剥片を転用したスクレイパーである。翼状剥片の剥離痕の打点はその後の打面調整により消失している。スクレイパーの刃部は片面からの細かな調整による。3は縦長剥片である。断面は三角形を呈する。表面が磨耗しており風化面は残っていないが、白色に風化するサヌカイトではないようである。4は両面調整石器である。縁辺からの階段状を呈する剥離痕により調整されている。縁辺はつぶれたようになっており、使用痕とも考えられる。

2. 石匙（図版第12-5、第14図-5）

サヌカイトを石材とするもので、片面に自然面を残す。調整はつまみの部分に集中的に施される。

3. 石庖丁（図版第12-6～12、第15図-1～7）

いずれもサヌカイトを素材とした打製の石庖丁であり、表面の磨耗が著しい。形態的には長方形のもの（1・2・4・5）、半月形を呈するもの（3・6・7）に大別できる。1はかなり小形であるが、両短辺に抉りをもつ完形品である。3～7は約半分を欠損している。



第14図 海岸部採集遺物実測図(i)

4. 石 錐 (図版第12-13, 第15図-8)

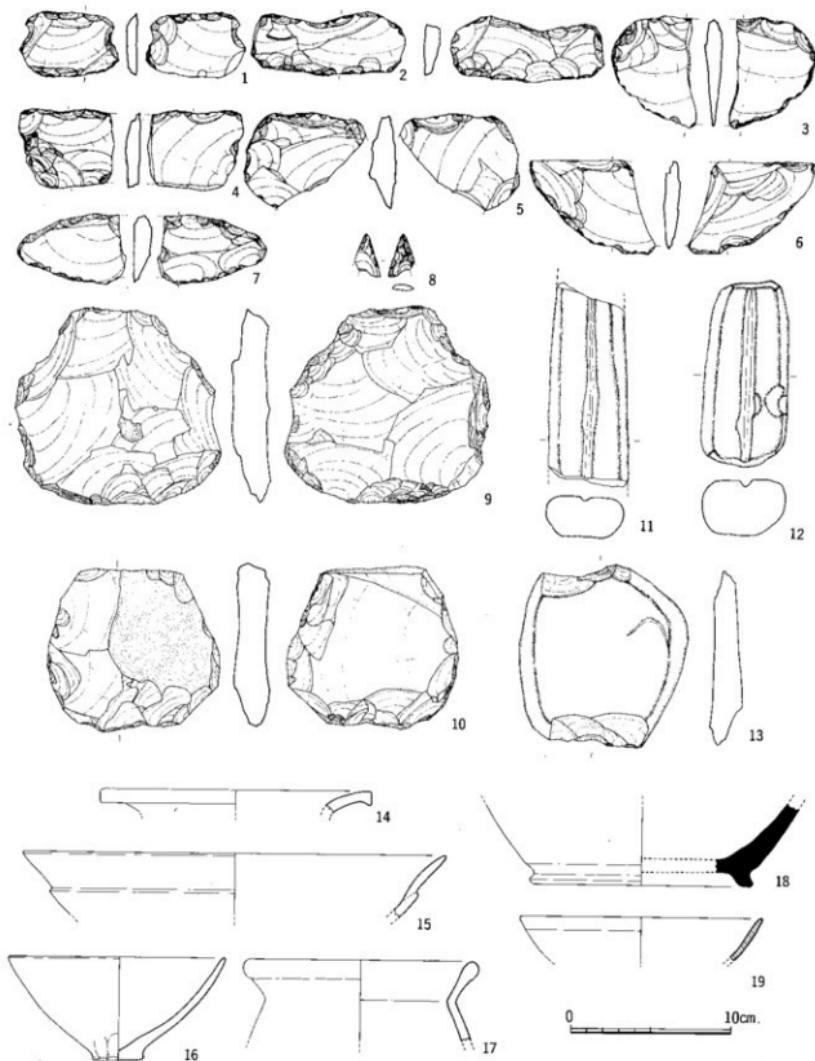
サヌカイトを石材に用いた打製の石錐である。抉りは浅く、両面の縁辺部に細かい調整が認められる。一方の逆刺を欠損している。

5. 石 鍬 (図版第13-1・2, 第15図-9・10)

いずれもサヌカイトを石材とする。9は両面からの調整によって茎部を明確につくりだしている。刃部には、調整剝離と重なって、使用痕と考えられる痕跡が認められる。10は片面に自然面を残すあらいつくりのものである。

6. 砥 石 (図版第13-3・4, 第15図-11・12)

いずれも砂岩を利用している。片面の中央部の長軸方向に、縦走する溝状の凹みを有する。

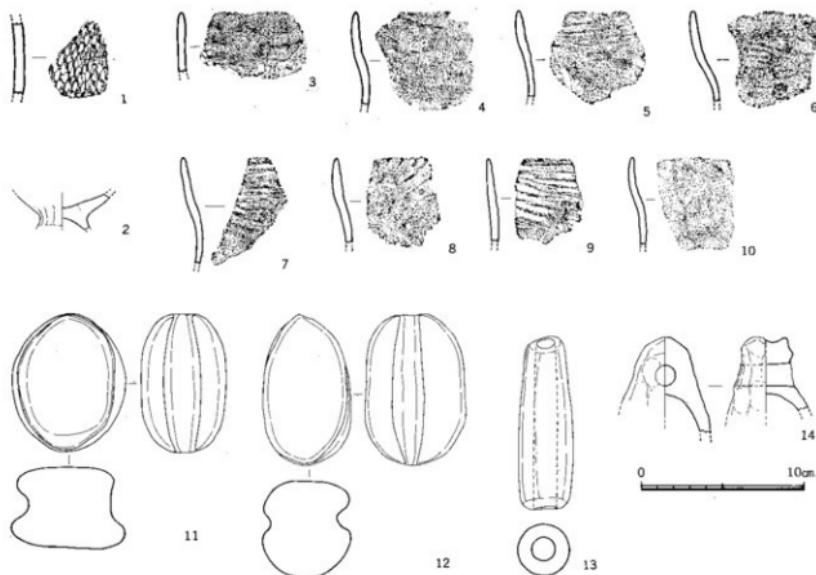


第 15 図 海岸部採集遺物実測図(ii)

11は凹みは研磨された痕跡をもつ。両端を欠損している。12は凹み部分に明瞭には研磨された痕跡は認められない。未製品とも考えられる。

7. 石錐 (図版第13-5, 第15図-13)

砂岩を用いた大形の石錐である。両端に調整を施した平たいもので、重さ350gを計る。



第16図 海岸部採集遺物実測図(iii)

8. 土器 (図版第13-6・8・10・11, 14-12~20・26~28, 第15図-14~19, 16図-1~10)

縄文時代から近、現代に至る多時期の遺物が含まれるが、量的には多くない。

縄文土器 (第16図-1) 2点採集した。表面に縄文を施した縄文時代中期に属すると考えられるものの1点(1)と、条痕を施した破片1点であり、いずれも内面の調整は不明である。ともに胎土に大粒の砂粒を多く含み、暗茶褐色を呈している。器厚は7mm前後である。

弥生土器 (第15図14~16) 14は壺形土器の口縁部である。大きく外反し、口径17.0cmを計る。15は高杯形土器の杯部である。杯部中央付近に明瞭な段を有する。16は鉢形土器であろう。口縁部はフォールスリムと考えられる。底部は、小さな貼り付けの平底である。口径13.5cmを計る。弥生時代後期に属するものであろう。

製塩土器 (第16図2~10) 脚台付のもの1点と厚手でタタキ目をもつもの10点を採集した。磨耗が進んでいるものが多いため、比較的表面の鮮明なもの8点を掲載した。2は脚台付製塩

土器である。磨耗が激しいため、成形時の脚台付け根の指頭圧痕がかろうじて観察できる程度である。3~10は口縁部の破片である。胎土に細砂粒を多く含み、赤茶褐色を呈する。古墳時代後期のものであろう。

須恵器（第15図-18） 壺形土器の底部である。高台は大きく外方に張り出し、端部は外反している。

瓦質土器（第15図-19） 梱の口縁部である。体部は丸味を帯び、先端は丸い。口縁部内外面が帶状に黒くなっている。

土師器（第15図-17） 瓢形土器の口縁部である。口縁端部は肥厚し、玉縁状を呈している。小砂粒を多く含む。

9. 土製品（図版第14-21~23・25、第16図11~14）

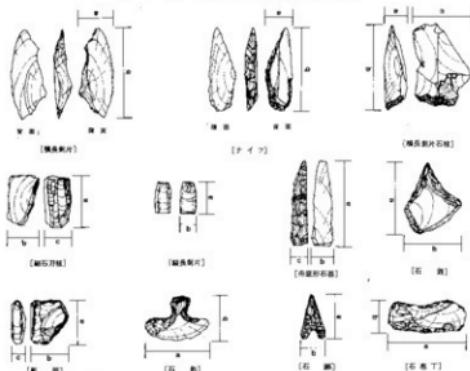
11・12は大形の有溝土鍤である。重量は各々315g、296gを計る。13は大形の管状土鍤である。重量は109gである。14は鉢形土製品である。指頭圧痕が顕著に認められる。

(中本・玉城・藤好)



(5) 調査区より櫛石島をのぞむ

第17図 各種石器計測部位一覧



第3表 初田遺跡出土石器観察表

(印は現存法)

No	遺物名	標因	國版	出土位置	材質	法量(m)			備考
						a	b	c	
1	ナイフ	7-1	7-1	A・c-12・イ・エ	サスカイト	1.5	4.9	-	背面の重要なネガティブ面が1面からなるやや薄いナイフ。
2	"	-2	-2	H・j-13・v・I	"	1.8	5.0	-	断面形状がほぼ三角形を呈し、むずかに背面にネガティブ面を残す。
3	"	3	-3	A・I-12・v・II	"	1.9	5.0	-	断面形状が三角形を呈するナイフ。
4	"	-4	-4	A・d-12・v・I	"	1.6	4.9	-	断面形状が二角形を呈する。小形のナイフ。
5	"	-5	-5	A・c-12・v・I	"	1.4	3.7	-	背面のネガティブな面が基部方向へずれる小形のナイフ。
6	"	-6	-6	A・I-12・v・I	"	1.5	3.4	-	打削調整面を残し背面に複数のネガティブ面を残す小形のナイフ。
7	"	-7	-7	C・T・s-N・I	"	1.5	3.6	-	ブランディング面は風化が進んだ面を用い、背面に複数のネガティブ面、側面に打削調整面を残す小形のナイフ。
8	"	-8	-8	A・I-12・v・II	"	1.7	3.9	-	風化が進み背面からブランディングを施す。薄いナイフ。
9	"	-9	-9	A・c-9・v・I	"	1.7	3.3	-	不規則な横長剣片を素材とした小形の切り出し形ナイフ。
10	"	-10	+10	A・I-5・v・I	"	1.4	3.5	-	ブランディングは両面から施す。
11	"	-11	11	A・表探	"	1.7	3.9	-	刃部がナイフの基部につけられ、ブランディングもやや斜めに入る不安定な薄いナイフ。
12	"	-12	-12	C・T・s-表探	"	1.7	5.1	-	ブランディング面は折れたような面からなりおいて他のナイフのように面がいいではない。
13	"	-13	-13	A・j-12・v・I	"	1.4	3.8	-	風面が進み黄色を呈するササキトイを素材し安定しないブランディングを施した薄いナイフ。
14	"	-14	-14	A・c-12・v・I	"	1.1	1.8	-	先端部以外は表探。
15	"	15	-15	A・c-12・v・I	"	2.5	2.2	-	ナイフの基部と考えられるが底面基部の調整が進で大きくやや傾斜の残る。
16	裏状剥片	-16	8-1	C・T・N-1・v・I (D・N-1・v・I)	"	2.6	4.8	-	やや厚く、背面が広い裏状剥片。
17	横長剣片	-17	-2	A・k-12・v・II	"	2.2	5.3	-	背面のネガティブな面が2面からなる打削調整を施した横長剣片。
18	"	-18	-3	A・m-9・v・I	"	3.1	4.9	-	"
19	"	-19	-4	C・T・I-1・v・I	"	3.6	4.7	-	背面に自然面を残す横長剣片。
20	"	8-1	-5	A・i-12・v・I	"	2.9	3.8	-	背面のネガティブな面が振進に切り合い、半分程欠損した横長剣片。
21	横長剣片石核	-2	-6	A・f-12・v・II	"	3.3	4.5	1.2	半分程欠損した打削調整石核。
22	"	-3	-8	C・T・I-1・v・I	"	3.4	2.7	2.0	作業面が複雑に切り合った石核で、半分程欠損している。
23	舟底形石器	-4	-7	A・k-12・v・II	"	5.9	3.1	1.4	甲板面がネガティブな面からなる舟底形石器。内端は欠損。
24	"	-5	-9	表探	"	4.8	1.1	0.8	横長剣片を素材とし甲板面からだけの調整を施した舟底形石器。
25	石鍬	-6	-10	A・m-9・v・II	"	5.4	4.0	-	二次加工の部位がかかるが、あらかじめ先端を意識しておらず、石鍬と考えられる。
26	鉈	-7	-11	表探	"	2.3	2.0	0.7	断面部をよく3辺に細かい横筋の刺繡が認められ、甲板面の縁部分には使用痕と考えられる刺繡痕が認められる。
27	尖頭器	-8	-12	A・c-12・v・II	"	2.9	2.6	0.7	石鍬とも考えられる素材の横長剣片を生かし、確定された少ない加工を施す。尖頭欠損。
28	スボール	-9	-13	C・T・S-I	"	5.1	1.8	0.8	やや大型のもので、片面は素材面を残す。一方の側面には調整溝が認められる。

No	遺物名	持岡	因版	出土位置	材質	法量(m)			備考
						a	b	c	
29	刀	-10	9-1	A・m-12-i-I	ガ	4.1	1.1	0.8	小形のもので、両面加工石器のスボルと考えられる。横長削片石核の欠損したものに欠損部から二次加工を施したとの。
30	横長削片石核	-	-2	A・i-8-D-I	ガ	3.1	2.0	1.7	横長削片石核が複数石核の欠損したもの。甲板面だけではなく逆方角の加工も認められる。
31	刀	-	-3	A・m-9-h-II	ガ	3.3	2.2	2.0	側面に平坦な面を残す断面民方形状のやや大形の縱長削片
32	縦長削片	8-11	-4	B・k-13-h-II	風化サメカイト	5.3	2.0	-	一個面に鋸いエッジを残す。断面三角形のやや大形の縱長削片
33	刀	-12	-5	A・k-12-i-II	ガ	4.3	2.3	-	側面に白然面を残す、断面形状の縦長削片。
34	刀	-	-6	A・i-12-D-I	ガ	4.6	1.6	-	肉厚面に平粗面を有する逆方角の縦長削片。
35	刀	8-13	-7	A・h-5,i,I	ガ	4.9	1.2	-	断面三角形を呈する小形の縦長削片。
36	刀	-	-8	A・i-12-z-II	ガ	3.3	1.1	-	断面三角形を呈する小形の縦長削片。
37	刀	8-14	-9	A・i-12-z-II	ガ	3.1	1.0	-	断面三角形を呈する小形の縦長削片。
38	刀	-15	-10	A・m-12-i-II	ガ	3.1	0.8	-	ガ
39	刀	-16	-11	A・b-12-z-II	サスカイト	0.8	1.4	-	ガ
40	刀	-	-12	A・h-9-i-I	ガ	2.4	0.9	-	ガ
41	細石刀核	9-1	10-1	A・k-12-D-I	ハリ賀安山岩	2.1	2.4	1.7	左側にボジ面を有する削片を素材とする。自然面を残し、基部は左側のボジ面からの細かい裏面によってとがる。打面は左側から本削片が形成され、さらに細かい調整面がある。側面は左側から本削片が形成され、作業面は一側面のみで断面は逆三角形を呈する。
42	刀	-2	-2	A・k-12-i-I	ガ	1.9	2.3	1.5	一部自然面を残し、えがきで形成。基部はとがる。打面は右側からのみが面で形成。側面は自然面と打面からの大きいえがき面で形成された。作業面は一側面、正面形は逆三角形を呈する。
43	刀	-3	-3	A・k-12-i-II	ガ	1.7	1.5	1.2	全くえがき面で形成。基部はとがる。打面は左側からキダリを残される。作業面は一側面、正面形は基部がとがった逆三角形を呈する。
44	刀	-4	-4	A・k-12-z-I	ガ	1.7	1.8	1.1	自然面を残す削片を素材とする。基部はとがる。打面は右側からのみが面で形成。側面は自然面と裏面の削面面を利用。作業面は一側面。正面形は逆三角形を呈する。
45	細石刀核	9-5	10-5	A・m-12-D-I	ハリ賀安山岩	1.7	2.0	1.0	右側にボジ面を有する削片を素材とする。基部は調整面によってとがる。打面は左側からのネギ面で形成。側面は右側からの大きな削面を呈する。打面は左側から本削片が形成され、作業面は一側面。正面形は基部の削面面を利用。作業面は一側面。正面形は基部がとがった逆三角形を呈する。
46	刀	-6	-6	A・m-12-z-I	ガ	1.9	1.8	0.9	一部自然面を残し、えがきで形成。基部は調整面によってとがる。打面は右側からのネギ面で形成。側面は素材の削面面を利用。作業面は一側面と二側面となる側面。正面形は逆三角形を呈する。
47	細石刃核片	-7	-7	A・i-12-z-II	ガ	2.4	1.2	0.6	右側にボジ面を有する削片を素材とする。基部は調整面によってとがる。打面は左側からのネギ面で形成。側面は右側からの大きな削面を呈する。打面は左側から本削片が形成され、作業面は一側面。正面形は逆三角形を呈する。
48	細石刀核	-	-8	A・m-12-i-II	ガ	1.7	2.5	1.6	全くえがき面で形成される。基部は調整面によって部分的にとがる。打面は右側からのボジ面から成る。同じ方向からの細かい削面がある。側面は素材の削面面と打面からの小さな削面を呈する。打面は右側から本削片が形成され、作業面は一側面。正面形は部分的に露がとがった台形を呈する。
49	ブランク	9-8	-9	A・i-9-z-I	ガ	1.8	2.6	2.3	一部自然面を残し、えがきで形成。基部は調整面によって部分的にとがる。打面は左側からのネギ面、側面は打面からのネギ面で形成。作業面は一側面。正面形は逆三角形を呈する。
50	細石刃	10-1	-10	A・k-12-D-II	ガ	2.4	0.9	-	断点部が二次調整により消失している横長削片。
51	横長削片	-2	-11	A・i-8-z-I	ガ	1.0	2.5	-	不安定な形状を呈する。ブランクを得る生じたものであろう。
52	縦長削片	-	-12	A・k-12-z-II	ガ	3.4	1.3	-	ブランクの素材。主要剥離面のボジティブ面をぞき窓面。
53	横長削片	-	-13	A・h-12-z-I	ガ	2.7	3.2	1.5	不安定な形状を呈する。ブランクを得る生じたものであろう。
54	刀	-	-14	A・i-12-D-I	ガ	2.0	2.1	-	ブランクを得る生じたものであろう。
55	刀	-	-15	A・m-12-D-I	ガ	1.8	1.9	-	ガ
56	原石	-3	-16	A・k-12-D-II	ガ	4.7	3.2	2.3	ごく一過のネガティブな剥離面を残さ、自然面でおおわれている。
57	細石刃柱?	-4	11-1	A・i-12-D-I	チヤート	1.2	2.6	1.4	一部自然面を残すチヤートを素材。表面は細かな剥離面による。打面はボジ面で形成され、周辺からの細かい剥離面が施される。側面は自然面と下方周辺からの剥離面。作業面は一側面のみで正面形は逆三角形を呈する。
58	(チヤート)	-	-2	A・i-8-z-I	ガ	1.8	2.4	1.4	チヤートとも考えられるが形がつぶされており、ハリ賀安山岩質のチヤートとは異なる細かな剥離面及び自然面からなる。
59	刀	-	-3	A・g-1-z-I	ガ	2.2	2.2	1.1	チヤートなり。作業面を左に持つもの。
60	刀	-	-4	C・T-z-N-I	ガ	2.7	3.3	1.6	チヤートなり。
61	刀	-	-5	A・m-12-D-II	ガ	2.1	3.1	1.3	チヤートなり。
62	刀	-	-6	A・h-5-D-I	ガ	2.7	2.8	1.1	チヤートとも考えられるが形がつぶされており、ハリ賀安山岩質のチヤートとは異なる細かな剥離面及び自然面からなる。
63	刀	-	-7	表探	ガ	1.7	2.4	1.6	チヤートとも考えられるが形がつぶされており、ハリ賀安山岩質のチヤートとは異なる細かな剥離面及び自然面からなる。
64	刀	-	-8	C・T-N-3-I	ガ	1.3	2.6	0.7	ガ

第4表 初田遺跡出土土器・土製品観察表

No	遺物名	捕図番号	図版番号	出土位置	焼成	色調	胎土	手法の特徴など
1	土器 壺	12-1		A・I・12-H・II	良	黄色がかったクリーム色	細砂粒をわずかに含む	高台径5.5cm、底部の破片である。磨耗が激しく内外面の調整は不明瞭。
2	瓦器 壺	-2		B・I・4-ロ・I	好	黒灰色	〃	内外面ともヘラ磨き削りが認められる。小片のため口径の復原は困難。
3	有溝土錐	-3		C・T・3-S・I	好	灰黑色	小砂粒を若干含む	長さ4.8cm、最大幅3.1cm、重量40g。
4	管状土錐	-4		C・T・4-ニ・I	好	赤褐色	細砂粒をわずかに含む	長さ5.2cm、最大幅1.7cm、重量12g。
5	〃	-5		C・T・3-S・I	好	〃	砂粒をほとんど含まず。	長さ3.4cm、最大幅2.0cm、重量10g

第5表 海岸部採集石器観察表 (石器計測部位は第17図参照)

No	遺物名	捕図	図版	材質	法量(cm)			備考
					a	b	c	
1	異状剝片	14-1	12-1	サスカイト	4.3	10.9	—	大形の異状剝片である。やや質の悪いサスカイトを素材とし、それほど磨耗していない。
2	翼状剝片石核	-2	-2	〃	3.1	7.5	5.6	翼状剝片石核を転用し、スクレイバーとしたもの。エッジの加工は片面から。
3	縱長剝片	-3	-3	〃	5.5	1.6	—	やや質の悪いサスカイトを素材としたもの。断面三角形を呈する。
4	両面側整石器	-4	-4	〃	4.9	4.4	1.5	周辺から打撃を加えた右核右器。自然面ではなくやや厚手である。
5	Li 遠	-5	-5	〃	4.8	3.6	0.6	つまみの周辺に重点的に細かい加工を施している。
6	石砲丁	15-1	-6	〃	6.3	4.1	—	小形のもので両端に抉りをもつ長方形のもの。
7	〃	-2	-7	〃	9.7	4.0	—	抉りを持たない長方形のもの。
8	〃	-3	-8	〃	5.7	6.3	—	半月形を呈したと考えられるが1/2ほど欠損している。
9	〃	-4	-9	〃	5.9	4.9	—	長方形の抉りのないもの。1/2ほど欠損。
10	〃	-5	-10	〃	8.2	6.2	—	〃
11	〃	-6	-11	〃	9.2	5.7	—	半円形を呈すると考えられるもので1/2ほど欠損。
12	〃	-7	-12	〃	6.6	4.4	—	〃
13	石鎌	-8	-13	〃	2.7	1.6	—	基部に抉りが入ったもの。抉りはやや難。
14	石頭	-9	13-1	〃	12.4	12.9	2.4	基部が明確なものである。
15	〃	-10	-2	〃	10.1	10.8	2.1	基部は明確さに欠け、一部自然面を残す。
16	砥石	-11	-3	砂岩	12.8	5.0	2.6	中央部に磨かれた無い溝が走る。
17	〃	-12	-4	〃	11.8	5.4	3.5	〃
18	石錐	-13	-5	〃	11.4	10.5	2.0	両端を打ち欠いたもの。

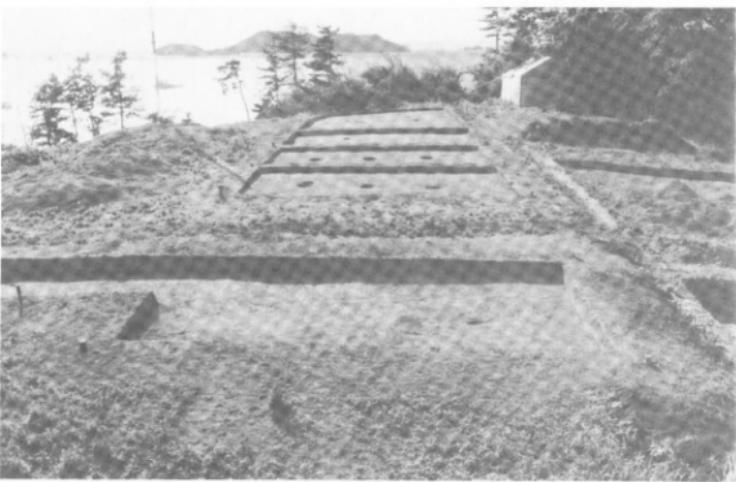
第6表 海岸部採集土器・土製品觀察表

No	遺物名	採取番号	回収番号	焼成	色調	胎 土	手 法 の 特徴 な ど
1	弥生土器壺	15-14	13-8	良	茶褐色	小砂粒を多く含む。	口縁部は大きく外反し、端部は外下方に肥厚している。口径17.0cm。
2	高杯	-15	-11	良	内面・茶褐色 外面・黒褐色	小砂粒を多く含む。	杯部は成形時の段を明瞭に残す。口縁部はやや外半ぎみにおさまっている。口径26.5cm。磨耗。
3	鉢	-16	14-26	II	内面・うすい茶褐色 外面・灰白色	細砂粒を多く含む。	体部から口縁部にかけて丸味を帯びている。底端付近の内面に指頭圧痕が認められる。底面内面は尖り気味。外面上部に斜面を形成したことによって底部を形成したもののよう。細砂粒が散在する。口径13.5cm、高さ6.5cm、底径3.1cm。
4	土師器壺	-17	13-10	II	やや赤味がかったクリーム色	小砂粒を多く含む。	口縁部は肥厚しやや玉縁状を呈している。口径14.7cm。磨耗。
5	須恵器壺	-18	14-28	不良	内面・茶褐色 外面・白灰色	小砂粒を多く含む。	高台は大きく外方に張り出し先端は外反している。内面に回転ナブ調整が認められる。高台径14.0cm。
6	瓦質土器椀	-19	-20	良	灰白色	細砂粒を若干含む。	高台は丸味を帯び先端はやや丸くおわっている。内面0.2cm、外面0.4cmの帯状に黒っぽい部分が認められる。口径15.2cm。
7	繩文土器	16-1	13-6	II	暗茶褐色	やや大粒の砂粒を多く含む。	外面に龜文を施す。内面の調整不明。
8	製塙土器	-2	14-27	II	II	細砂粒を若干含む。	脚台は小さい。外面に指頭圧痕が認められる。
9	II	-3	-12	II	II	II	外面に平行タタキ目。(口縁部に平行)
10	II	-4	-13	II	II	II	II (II)
11	II	-5	-14	II	灰褐色	II	II (口縁部は平行。) II (体部は右下がり)
12	II	-6	-15	II	茶褐色	II	II (右下がり)
13	II	-7	-16	II	赤褐色	II	II (口縁部に平行)
14	II	-8	-17	II	茶褐色	II	外面に斜平行タタキ目。(右上がり)
15	II	-9	-18	II	II	II	外面に平行タタキ目。(口縁部に平行)
16	II	-10	19	II	II	II	外面に斜平行タタキ目。磨耗。
17	有溝土鍤	-11	21	II	II	大粒の砂粒を若干含む。	長さ8.5cm、最大幅6.9cm、重量315g。
18	II	-12	-22	II	II	II	長さ9.2cm、最大幅5.4cm、重量296g。
19	管状土錐	-13	-23	II	灰褐色 (部分的に茶色)	II	長さ10.7cm、最大幅3.3cm、重量109g。
20	たこ巻形土器	-14	-25	II	茶褐色	II	指頭圧痕が顯著に認められる。
21	繩文土器	-	13-7	II	内面・赤茶色 外面・茶褐色	大粒の砂粒を多量に含む。	外面に条痕が施されている。表面はあまり磨耗していない。
22	土師器壺	-	9	II	茶褐色	ほとんど砂粒を含まず。	胴部から口縁部にかけてなだらかなカーブをえぐく。口縁端部は丸く肥厚している。磨耗。
23	(土)鏡脚	-	14 24	II	灰茶色	II	使用時の内側にあたる部分が二次焼成によって黒変している。断面は円形に近い椭円形を呈する。

図 版



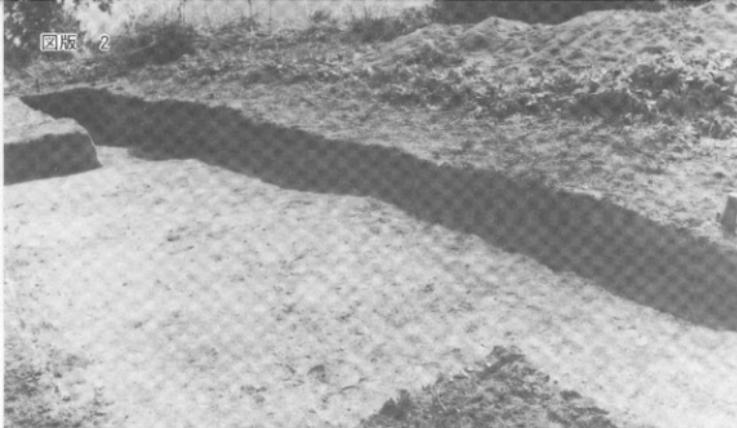
(1) A地区遠景
(北から)



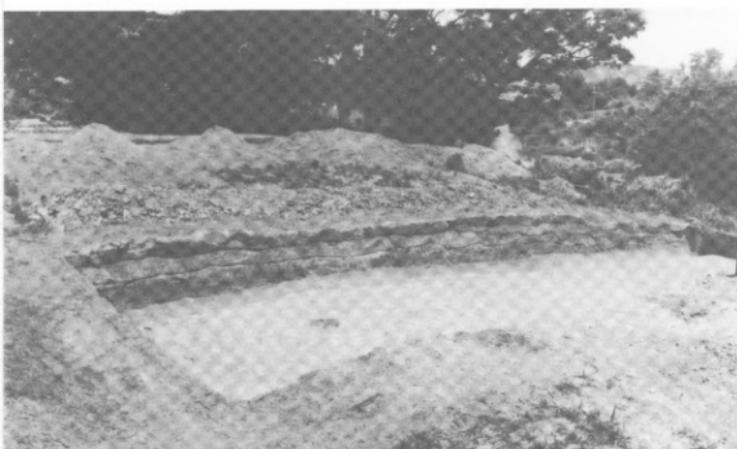
(2) A地区h+i列
(東から)



3 A地区R列g+h-i
(北東から)



1 A 地区 R列a~f
(北東から)



2 A 地区 R列j~m
(南東から)



3 B 地区遠景
(北から)



1 B 地区完成状況
(北から)



2 B 地区i列
(北西から)



3 B 地区g~i列 3.
4 (北から)



1 B 地区Ⅲ列 3, 4
土層（東から）



2 B 地区Ⅲ列
(南東から)



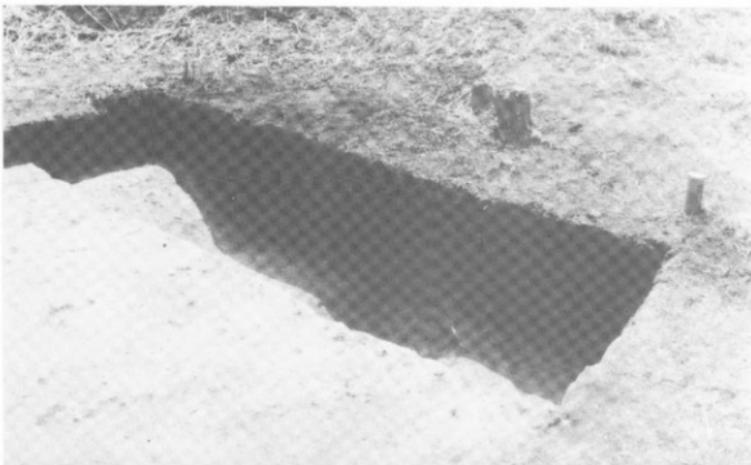
3 B 地区Ⅲ列
(南から)



1 C地区遠景
(北西から)



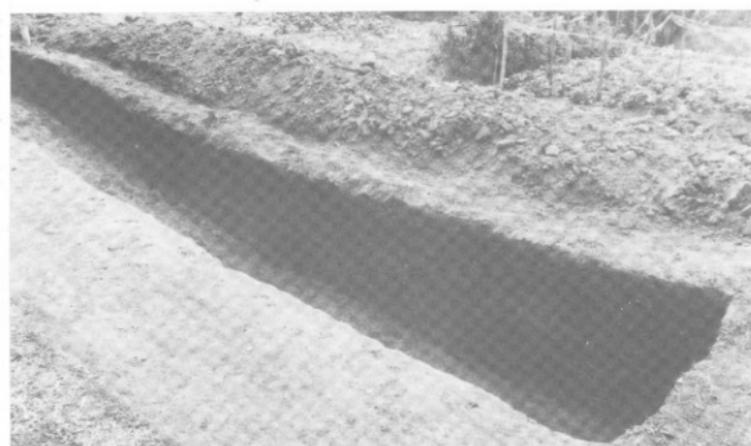
2 C地区第1トレ
ンチ (西から)



3 C地区第2トレ
ンチ (北東から)



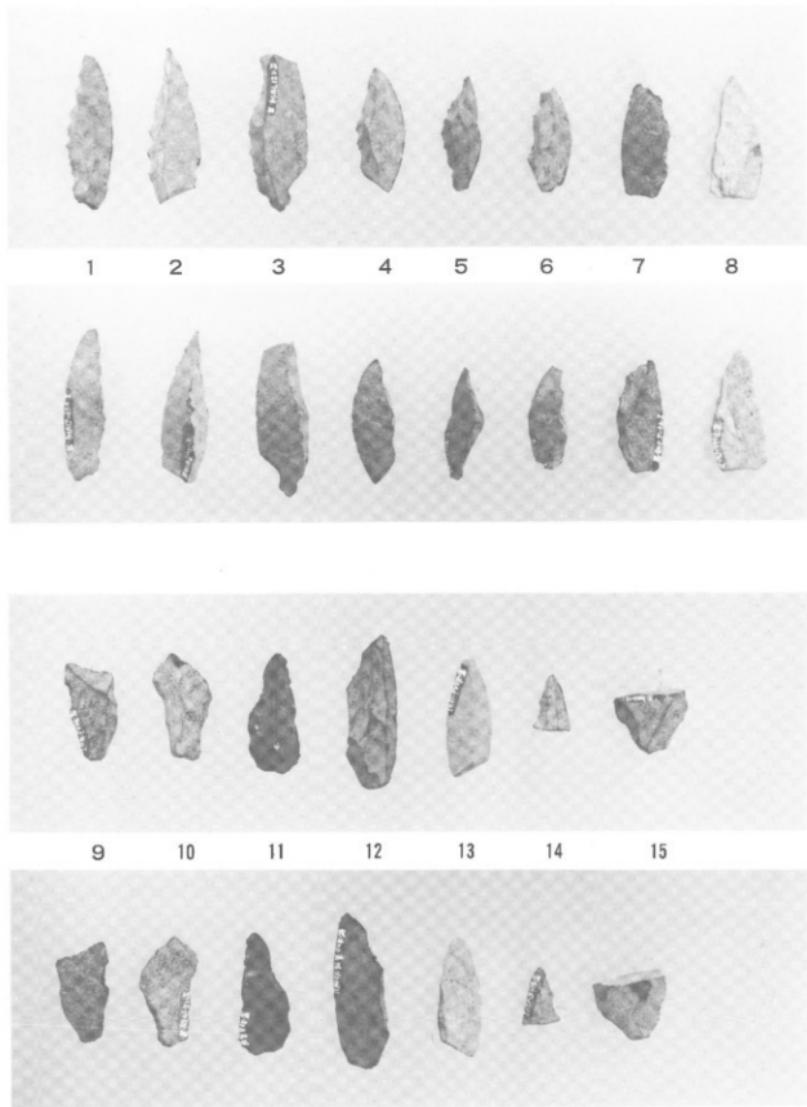
1 C地区第3トレンチ（北から）



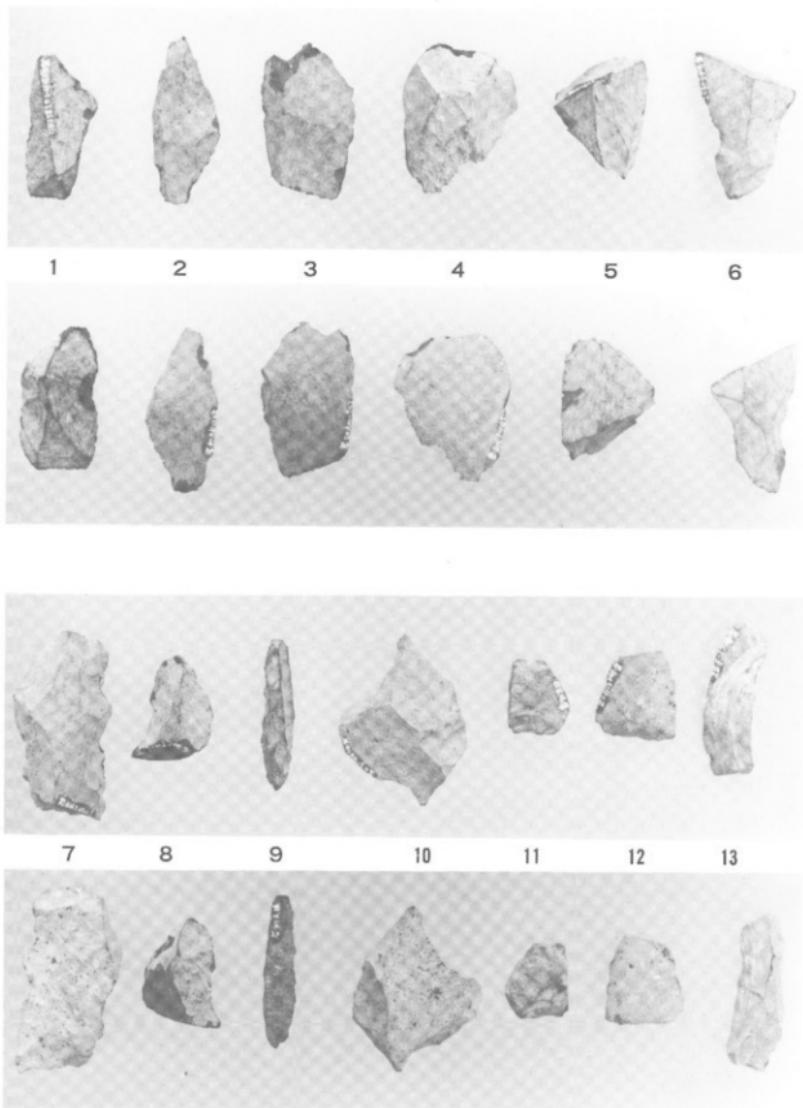
2 C地区第3トレンチ（北東から）



3 C地区第4トレンチ（西から）



ナイフ形石器



翼状剝片・同石核・横長剝片・同石核・舟底形石器他



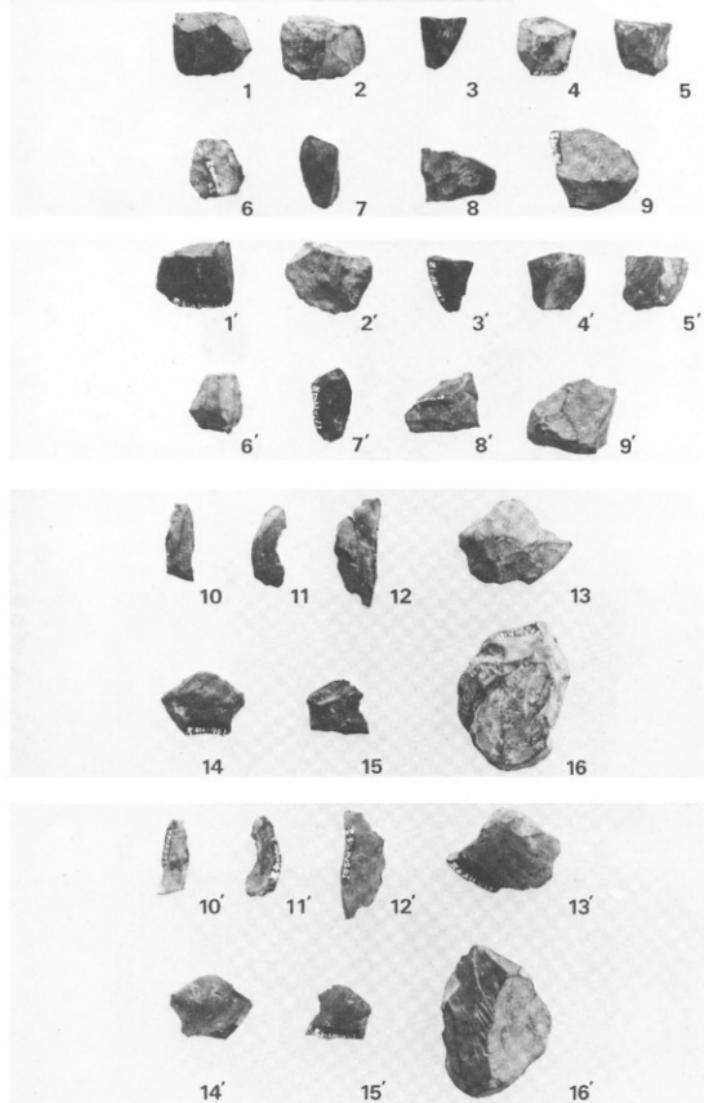
1 2 3 4 5 6



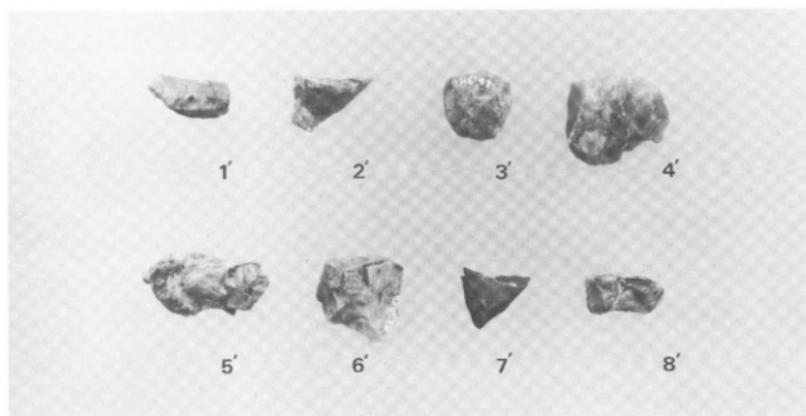
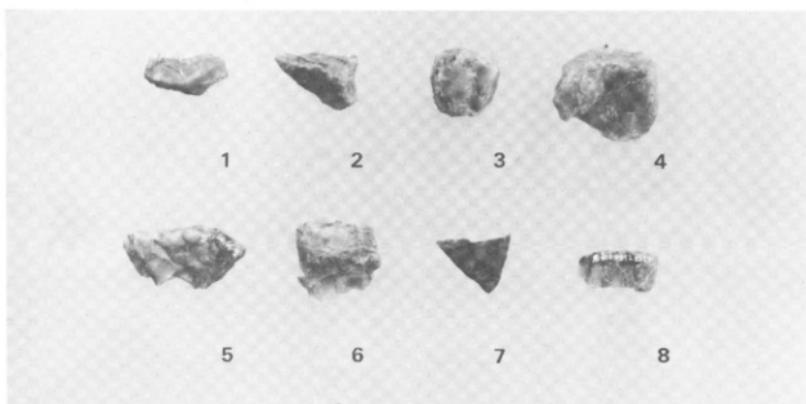
7 8 9 10 11 12



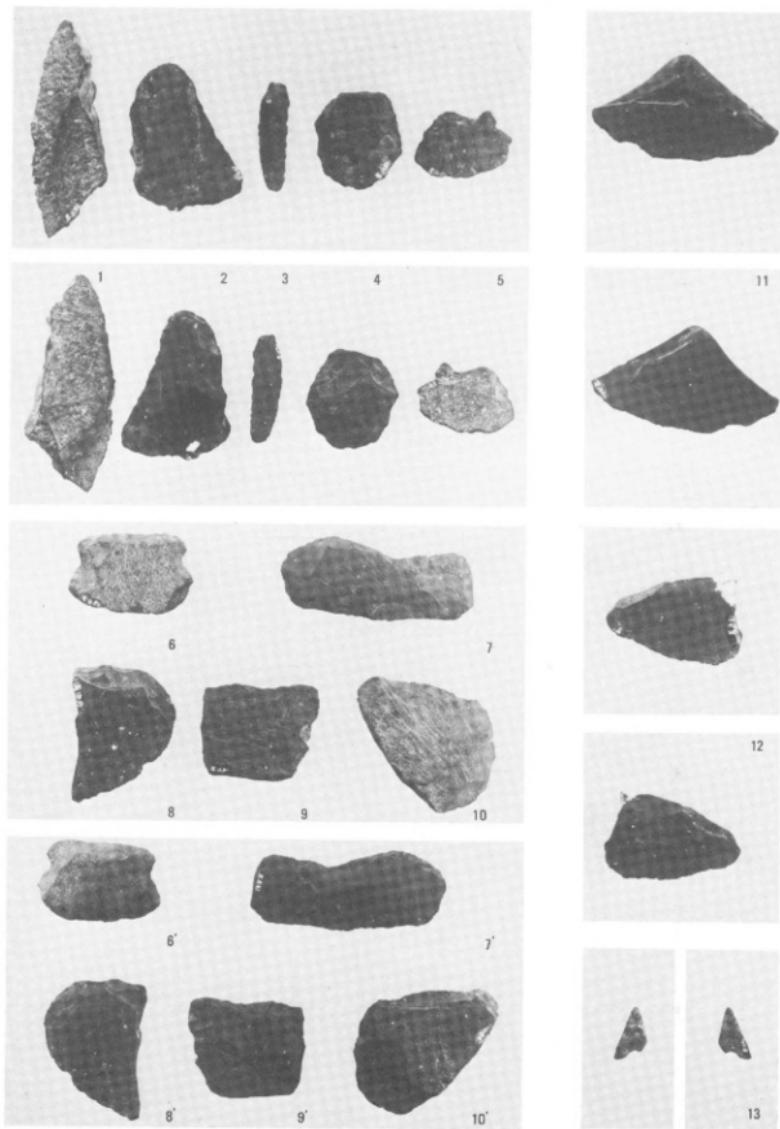
縦長剥片他



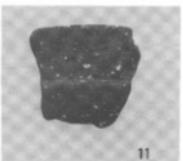
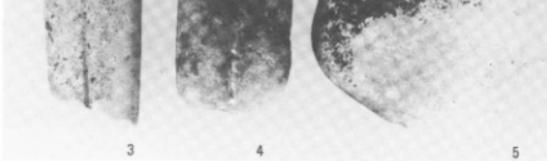
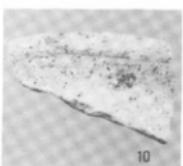
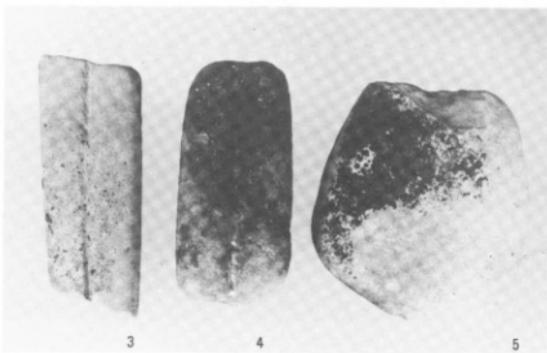
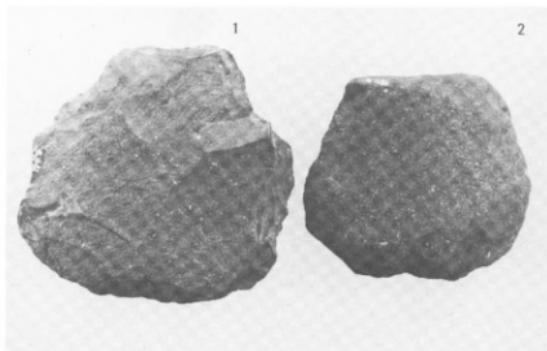
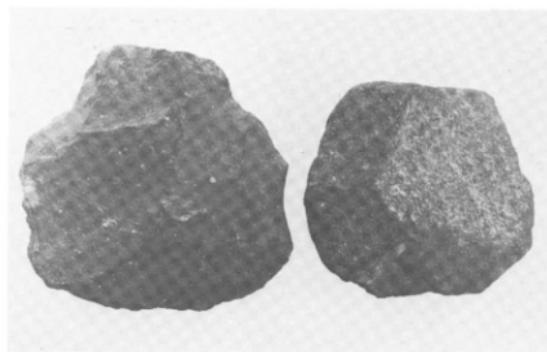
細石刃核・細石刃・ハリ質安山岩原石他



チ ャ ー ト

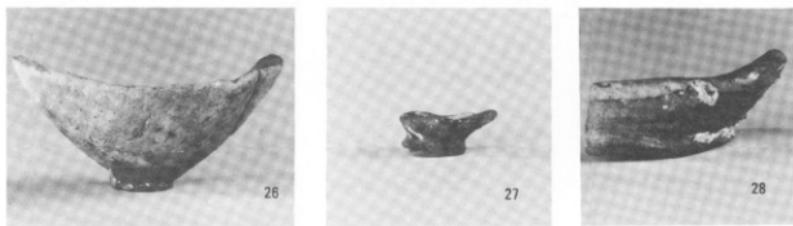
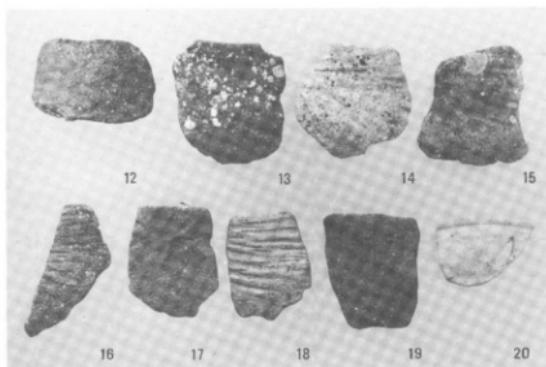


海岸部採集石器



海岸部採集石器・土器

图版 14



海岸部採集・土器・土製品

III 櫃石島の調査

第1章 はじめに

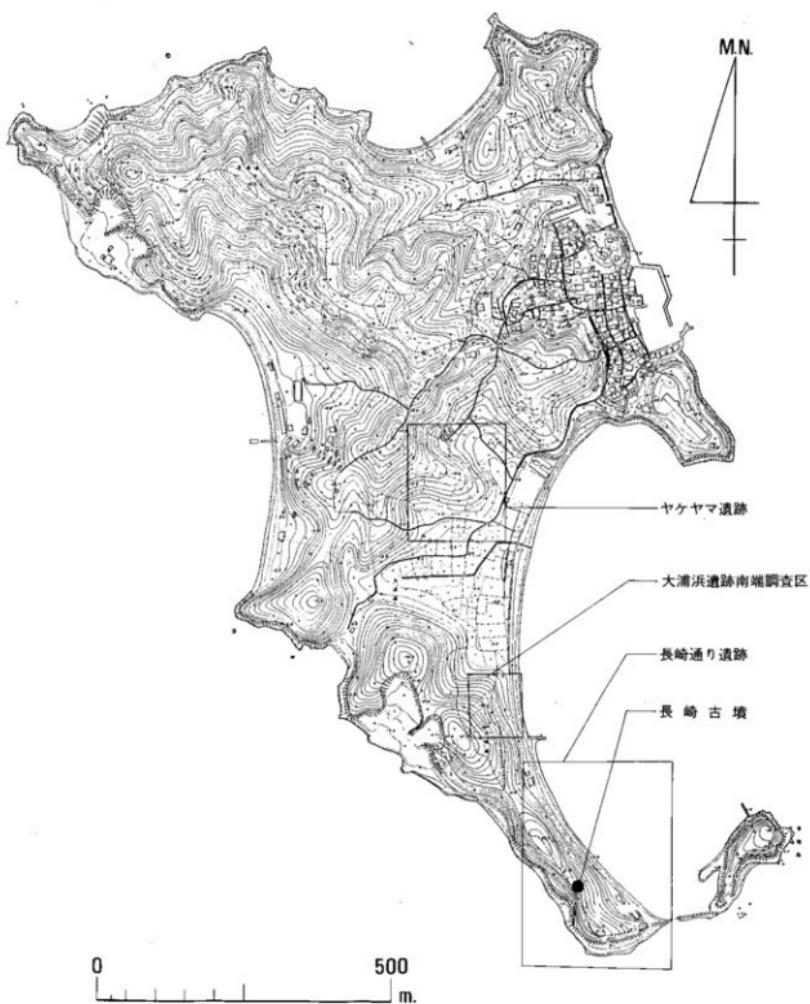
第1節 調査の経過

坂出市（香川県）と倉敷市下津井（岡山県）の間に浮かぶ島々のうち、もっとも北に位置するのが櫃石島である。坂出市から約10km、他方岡山側から約1kmの間にあり、行政区画上は坂出市に属するが、島の歴史や住民の生活などは岡山の影響を強く受けている。島は花崗岩を基盤とし、島内の二ヶ所で採石が行なわれている。周囲約5.4km・総面積0.85km²の小島である。島の地形は標高78mをピークとし、そこより派生する山塊と、島の四ヶ所にある砂浜から成っている。島の人口は385人（昭和57年11月1日現在）、産業は漁業中心である。

昭和51年6月より、瀬戸大橋建設に伴う予備調査が櫃石島で始まり、翌52年7月まで実施された。その成果に基づき、昭和54年7月9日より、本調査が花見山遺跡で開始された。本年度は、櫃石島における発掘調査の最終年度にあたる。調査対象地区は、大浦浜北端部2,400m²・ヤケヤマ遺跡4,700m²・長崎通り遺跡5,800m²・大浦浜遺跡南端地区400m²である。



大浦浜遺跡発掘作業風景



第1図 檜石島全体図